沖縄市文化財調査報告書第二十六集

むかしばなし Ⅰ

二〇〇二年三月
沖縄市教育委員会

むかしばなし I

昭和55年度　池原公民館での調査風景

昭和60年度　知花公民館での調査風景

平成２年度　嘉間良公民館での調査風景

平成２年度　泡瀬一区公民館での調査風景

平成２年度　上槻ウサさん宅での調査風景（宮里）

平成３年度　文化センターでの調査風景

あいさつ

沖縄市教育委員会
教育長　小　渡　良　一

このたび沖縄市文化財調査報告書第二十六集『むかしばなし　I』を発刊するにあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

昔話は地域の風土の中で育まれ、時代を越えて連綿と語り継がれてきた先人の遺産といえるものです。しかし、めまぐるしく変化してゆく時代の流れは価値観の多様化をもたらし、昔話を語りついでゆくことも次第に困難な状況を呈してきております。

こうした背景を重視し、沖縄市教育委員会では、文化財保護行政の一環として、昔話の保存を図るため、昭和五十五年度から沖縄国際大学口承文芸研究会の協力をあおぎ本格的な民話調査を実施して参りました。その結果、予想を上まわる話者の皆さまの話を記録にとどめることが叶いました。本昔話集は通算三冊目の上梓となっております。

今回の編集にあたっては、様々な機関誌に掲載させていただきました昔話を集成するという方針を採用しました。よって、昔話、笑い話、伝説ありと話も多彩をきわめております。これらの話の中には、生きていくための知恵や愛のすがたがふんだんに織り込まれ、時代がかわっても人々の生き方に不変の領域があることを教えてくれます。

本報告書が、家庭や学校、ひいては生涯学習の場で広く活用され、次代を担う子どもたちの愛郷心を培う一助となることを期待してやみません。

おわりに、お話を聞かせて下さいました地域の皆様ならびに関係者にたいしまして、深く感謝申し上げます。

二〇〇二年三月

凡例

一　民話集の構成

①　この民話集は、『農協だよりみさと』（一九八六年八月号～一九八八年三月号）、『美里郵便局』（一九九五年六月～一九九六年一月号）、『広報おきなわ』（一九八七年四月～一九八八年三月号）に掲載したものをまとめたものである。

②　この民話集には、話者の重複や、同類の話が頻出するが、語りの良さと、語りの変化が見受けられるのであえて掲載した。ただし、話者が同一で、同類の話は削除した。

③　それぞれの既刊民話についての詳細は一覧表にまとめ掲載した。

二　本文について

①　民話採集時においては、話者が時々話を中断したり、つぎに続く話の内容を思い出し、いきなり話し始めたりすることがある。このような話は、補足調査などや話の筋を検討の上、編集者によって加筆し補足したものもある。

②　話の始めに題名、話者名及び生年月日、字名を記し、収録テープNO（収録テープに番号をつけ博物館に保管している）と収録面を記した。

③　題名は機関誌の読者を配慮し、編集者が変えたものもある。題名下の（　）内は民話採集時における話型名である。

④　「　」の会話部分は改行にした。ただし、心の中で思っていることや、考えていることは〈　〉で示し、改行しなかった。

⑤　注記については、地名、地域独特な意味をもつ語句、民俗語彙、注記が必要と思われる箇所については、掲載話の後ろにできるだけ注記した。

三　本文の掲載順序

①　『農協だよりみさと』・『広報おきなわ』・『美里郵便局』の順に配した。

四　原稿作成、及び編集、資料整理

辺土名初美・金城直子・仲本朝彦・宮城利旭
比嘉清和・宮城昭美・當眞　香・前田一舟

むかしばなしI　目次

口　絵
あいさつ　沖縄市教育委員会　教育長　小　渡　良　一……1
凡　例……2
本文目次……4
本　文……7
機関誌別民話一覧……97
参考文献……98
おわりに……100
年令早見表……99

本文目次

【農協だよりみさと】

1 三人の力持ち …… 盛島 五郎（明治三九年一二月一〇日生） …… 池原 …… 7
2 犬と猫と猿の三枚銭 …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 10
3 カニの背中がくぼんでいるわけ …… 島袋 盛保（明治三七年一一月二六日生） …… 知花 …… 13
4 クシャミをしたらなぜ「クスケー」というのか …… 松下 盛一（明治四五年五月一〇日生） …… 池原 …… 15
5 塩吹き臼 …… 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生） …… 登川 …… 19
6 登川部落の始まり …… 平田 嗣光（大正六年五月五日生） …… 登川 …… 21
7 カフンジャー由来① …… 松下 盛一（明治四五年五月一〇日生） …… 池原 …… 23
8 カフンジャー由来② …… 島袋 タケ（大正七年九月一日生） …… 知花 …… 24
9 シーグダキクミ …… 島袋 盛保（明治三七年一一月二六日生） …… 知花 …… 25
10 ヤバチャミーと行商人の勝負 …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 27
11 アフグン親方 …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 29
12 ヤバチャミーとスムカタランボー …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 32
13 米寿由来 …… 喜納 兼増（大正一一年二月一〇日生） …… 登川 …… 35
14 エイサーの始まり『悪払いから』 …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 38
15 エイサーの始まり …… 仲宗根トミ（大正一二年五月五日生） …… 登川 …… 39
16 察度王 …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 41
17 知花当石川 …… 川上 亀（明治二九年三月一八日生） …… 美里 …… 44
18 メーヌシジヌティーグワーウスメー …… 川上 雄善（大正一〇年一二月一七日生） …… 美里 …… 45
19 狼になった金持ち …… 栄野比トヨ（大正六年一〇月一〇日生） …… 知花 …… 46
20 カフンジャー由来 …… 島袋 盛保（明治三七年一一月二六日生） …… 知花 …… 49
21 柳節の始まり …… 島袋 次郎（明治三四年四月七日生） …… 知花 …… 51
22 歌う骸骨 …… 島袋 盛保（明治三七年一一月二六日生） …… 知花 …… 54

【広報おきなわ】
23 イシザルとジジョー …… 島袋　次郎（明治三四年四月七日生）知花 …… 56
24 阿麻和利と鬼大城 …… 島袋　盛保（明治三七年一一月二六日生）知花 …… 58
25 侍の牛 …… 久場　政二（明治四三年七月二五日生）園田 …… 61
26 子育て幽霊 …… 辺土名ナベ（明治三七年五月一〇日生）池原 …… 63
27 アジャナの兄弟 …… 島袋　次郎（明治三四年四月七日生）知花 …… 65
28 カシチー由来 …… 新里八十孫（大正元年八月一〇日生）知花 …… 67
29 名護親方 …… 喜納　兼正（明治四二年九月二六日生）登川 …… 69
30 歌・三線の始まり …… 島袋　次郎（明治三四年四月七日生）知花 …… 71
31 鬼餅由来 …… 東　シズエ（明治四〇年六月二五日生）池原 …… 73
32 大蔵の客 …… 幸島　マツ（明治四二年一月二五日生）池原 …… 75
33 十二支由来 …… 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川 …… 77
34 蛇婿入 …… 高良　カマ（明治二四年一〇月五日生）登川 …… 79

【美里郵便局】
35 「ジュリ墓」での肝試し …… 嘉陽　宗利（大正一一年二月一〇日生）美里 …… 81
36 お盆の始まり …… 仲宗根トミ（大正二年五月五日生）登川 …… 83
37 主人の命をねらう犬 …… 島袋　義堅（大正三年一二月一日生）古謝 …… 85
38 カマドの屁 …… 仲程　セツ（明治三七年一二月一五日生）知花 …… 86
39 蛸に骨のないわけ …… 松岡　俊吉（大正三年一一月二〇日生）美里 …… 87
40 扇の寿命 …… 桑江　朝盛（明治四五年五月一七日生）上地 …… 89
41 鬼餅由来 …… 栄野比トヨ（大正三年一〇月一〇日生）知花 …… 90
42 猿長者 …… 島袋　サダ（明治三六年九月五日生）高原 …… 93
43 サギビサーをしてはいけない …… 上根　ウサ（明治三一年一二月五日生）宮里 …… 95

挿絵：長浜　益美

昭和三十三年沖縄市に生まれる。
一九八八年琉球大学医学部卒業。現在歯科医。
一九八六年より沖縄市の民話の挿絵、わらべ歌の挿絵、紙芝居など多くの作品をてがける。

【農協だよりみさと】

1　三人の力持ち

盛島五郎（明治三九年一二月一〇日生）池原

昔、池原[1]にウーヌナーカウスメー、[2]カーローベンサー、[3]メーローウスメー[4]という三人の力持ちがいたそうです。三人はいつもスクブ御嶽[5]に手を合わせて「催眠術[6]を教えて下さい」とお祈りしてから、武術のけいこをしていたのでデーユー（たいそう）力持ちになり、三人に勝つ者は誰もいなかったそうです。

スクブ御嶽のスクブとは籾殻[7]のことで、三人は稲を刈ってきたら、それをチョーカサ（おわん）に入れてつつき、クミクガシにして食べた後の籾殻（スクブ）が山のように積まれたことからスクブ御嶽という名が付いたそうです。

ある時、三人は読谷の座喜味[8]でアシビ[9]（村芝居）があるというので出かけて行きました。アシビに参加するために座喜味に来ていた楚辺部落の八十余才になるサーダカ（セジ高い）生まれをしたおじいさんが三人を見て、〈ムンヤッサー（只者ではない）〉と思って、

「お前たちの心臓をさわらせてくれ」

と、三人の胸に手をあて、

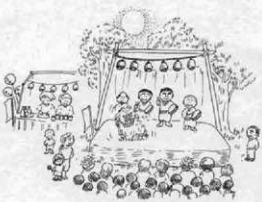
「これは普通の人ではない。私たち楚辺のシンカみんなでかかっても勝てる相手ではない」

と言ったそうだ。

ナカウドゥイになると、先程のおじいさんが、

「ナカウドゥイはあなた方がやってくれませんか」

と言うので、始めにカーローベンサーが出た。彼は隼[10]のようにすばっしっこい早技をす



るのでその名が付いているが、カーローペンサーはティー（技）を使って、
「エイッ」
と飛び上ったかと思うと姿が見えなくなったそうです。そして天井から降りてきて、
「私の手並みはもっとありますが、次の兄にゆずります」
といって座った。
次にウーヌナーカウスメーが出ると、青年頭に芭蕉を根っこから掘りおこして持ってこさせ、倒れないように立たせた。
「それでは私が棒を使ってみせよう」
と、
「ハイッ、ニーセー」
とかけ声もろとも芭蕉を切ったそうです。が、芭蕉は倒れないでそのまま立っていたので、ウスメーが、
「これは切れているか、切れてないか」
と聞くと、見ている人は、
「切れていません」
と答えた。
「では芭蕉を持ち上げてごらん」
と言うので二人の青年が持ち上げてみると、切り口もあざやかにまっぷたつに切れていた。みんな、
「これは珍しいことだ」
といってびっくりしていたそうです。
最後にメーローウスメーが出てきて、マータク（竹）を持ってこさせ、親指と人差し指でカミソリのように竹をパチパチしごいて葉を落していったそうです。（この人の手は鎌よりも強かったそうだ）
三人のティーが終るとセジ高いおじいさんは、三人の前に正座して、

「あなた方の立派なティーをおがませてくれてありがとう」

とお礼をのべて、青年たちに池原村まで送らせたそうです。

注　①池　原……沖縄市の字。沖縄市の北端に位置し北は石川市、東は具志川市に境を接する。方言では「イチバル」という。

②アーサナーカウスメー……芭蕉の中に家があり、芭蕉の中で武勇を習っていたのでその名がついた。

③カーローベンサー……ヘンサは「はやぶさ」のことで、飛ぶのが早い。鳥のように身が軽くすばしっこかったことからついた名前。

④メーローウスメー……メーローは屋号で、前道からついた名前。

⑤スクプ御嶽……現在沖縄市登川のキャンプヘーグ跡地にできた新興住宅地の中程にある小山（こんもりとした山）。池原部落の拝所。

⑥クガシ……水につけておいた米をすりつぶし、水にといたもの。（沖縄語辞典）

⑦読　谷……沖縄本島中部の西海岸に面する。

⑧座喜味……読谷村の字。護佐丸が築いた座喜味城の城下町として栄える。

⑨アシビ……農村において豊年を祈願して行われる祭り。踊り、狂言、組踊と演目が多彩で村人の楽しみの行事のひとつである。

⑩楚　辺……読谷村の西海岸に位置する字。

⑪池原村……王府時代－明治四一年の村名。

昭和六〇年七月一日　金城茂雄・辺土名初美聴取　T8A3

2　犬と猫と猿の三枚銭（犬と猫と指輪）

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

昔、仲のいい金持ちと、貧乏者がいました。ある日、猿の子供が川で溺れかかっているのを見て貧乏者が助けてやりました。すると親猿が、

「お礼をしたいのですが何が欲しいですか」

と言いました。貧乏者は子猿から猿の三枚銭をもらうように言われていたので、

「猿の三枚銭が欲しいです」

と答えました。親猿は大切な宝物なので困りましたが、その三枚銭を貧乏者にあげました。

三枚銭を貰った貧乏者はみるみるうちにお金持ちになったので、友達の金持ちに、

「お前はどうしてこんなにエーキん人になったのか」

「実は溺れている子猿を助けたら、お礼に猿の三枚銭を貰いました。それが銭箱の中でどんどんお金を増やしてくれるのでお金持ちになったんですよ」

と答えると、金持ちは、

「私にも貸してくれないか」

というので、

「いいですよ」

と言って貸してやりました。

何日かたってから、

「三枚銭を返してくれ」

と言ってもなかなか返してもらえないので貧乏者は犬と猫に、猿の三枚銭をとりもどしてくるよう使いにやったそうです。

犬と猫は金持ちの床下に座り〈チャーサラーシムガヤー（さて、どうやって取ってこようか）〉と考えていると、ネズミがやってきたので、猫が捕まえて、

「銭箱の中に猿の三枚銭が入っている筈だから、それを取ってこい。さもないと、お前を食べてしまうぞ」

と言うと、ネズミは、

「取ってきます」

と銭箱にカチカチ穴を開けて猿の三枚銭を取り、猫に渡しました。

三枚銭を持って帰る途中の港の所で、犬が猫に、

「お前は口が短いので三枚銭を落とすといけないから口の長い私が持とう」

「ああ、そうか。いいよ」

と渡し、

「飲み込んだらいけないよ」

と言うと、犬は、

「はい」

と返事をした拍子に、その三枚銭を海の中に落としてしまいました。犬は海に落としてしまったので仕方がないとあきらめて泳いで帰ったそうですが、猫はそこに座り涙をポンポン落として泣いていました。すると、①アカグチャーがとびはねたので猫が捕まえて、

「猿の三枚銭を取ってこい。さもないと喰ってしまうぞ」

と言ったので、アカグチャーはびっくりして取ってきました。

猫はアカグチャーが取ってくれた三枚銭を持って家に帰りました。家に着くと犬は主人に、

「三枚銭は海に落としてなくしてしまいました」

といって御馳走を食べていたそうですが猫が主人に、これまでのいきさつを話すと主人は、

「ああそうか」

と言って、

「クヌヒャーユクシムニーシ（こいつ、ウソをつきやがって）」

と犬をおっ払いました。

翌日、犬は猫に、

「よけいなことをいって」

と追いかけました。するとその時に②アカマーミーが庭にほされていたらしく、猫はその豆の上を飛び越えて逃げたらしいが、犬はすべってころびました。

猫は豆のおかげで逃げることができたので、その時から猫は豆を食べなくなったんだって…。

注　①アカグチャー・・ブダイ科。ハゲブダイ♀。（アカグチブダイ）。特徴は歯は白く、口のまわりは赤く、体は全体に赤褐色のまだら状。

②アカマーミー・・小豆。

昭和六〇年九月九日　辺土名初美聴取　T19B15

3　カニの背中がくぼんでいるわけ（猿の生肝）

島袋盛保（明治三七年一一月二六日生）知花

カニの背中がくぼんでいる話。カニは陸でもよく遊ぶので、馬に踏みつけられたため背中がくぼんだという話もあるが。もうひとつの話は・・・

龍宮の王様が病気になったので王様が、

「私は陸の生き物の生肝を食べると治るというんだが、誰か私のために取ってきてくれる者はいないか」

と言われました。海に住んでいる者が陸に上がると死んでしまうので、誰がいいだろうとみんなで協議した結果、海の中でも陸の上でも息のできるカニがいいということになり、カニを龍宮の使いとして出しました。

カニが陸にあがると、猿が山で桃を食べていたので、

「おいしいか」

と聞くと、

「おいしい」

と答えたので、

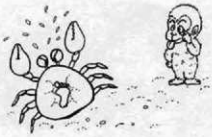
「それなら私にも下さい」

「いいよ」

と猿はカニに桃を投げてあげました。するとカニは、

「陸の桃はどうしてこんなににがいのですか。海の桃は陸の桃とは比べ物にならないくらいとてもおいしいですよ。あなたさえよければ、一緒に行きませんか」

といわれたので、



「それなら、一緒につれて行ってくれ」
とカニの背中に乗り行きました。（猿を溺れさせて殺してしまうと生肝にならないので、おぶって行った様子）もう少しで龍宮につくという時に、

アギにムムありば　サギにあんとぅむてぃ　（陸に桃があるなら、海にもあると思い）
だまさってぃサールー　命どぅちりる　（騙された猿は殺されてしまう）

と、側の動物がうたったので
「どうして、そういうことを言うのか」
と聞くと、
「あなたは生肝を取られるから今日までしか生きていないよ。殺されてしまうんだよ」
と言われた。猿はびっくりしてしまい（殺されてしまっては大変だ、どのようにして逃げようかなあ）と、あれこれ考えていたらしいが。猿はタクマーマンディ（猿知恵といってかしこい）カニに、
「生肝が必要ならさっきそういえばいいのに、桃の木に下げてきてしまった。あなたが必要なら取ってこよう」
「それは大変だ。さあ早く取ってこよう」
と取りに戻りました。すると、今度は陸にいる動物が、

うちにあるチモー　ふかにあんてぃうむてぃ（内にある肝なのに　外にあると思って）
むどぅてぃちゅーるガニん　ちゃーがないら（戻ってくるカニは　どうなることやら）

といって歌った。猿は、
「お前は、嘘をついて私を連れて行ったな」
と怒ったので、カニは急いで砂の中に隠れようとしたが、猿はすばしっこくカニの背中を踏んづけたので、その時からカニの背中はくぼんでいるという話です。

昭和六〇年一〇月一三日　辺土名初美・下田博美・島袋芳敬聴取　T22A10

4　クシャミをしたらなぜ「クスケー」というのか（クスケー由来・七・五・三の由来）

松下盛一（明治四五年五月一〇日生）池原

昔、[1]山原にたいそう大金持ちの夫婦が住んでいました。長い間子供に恵まれなかったので、〈こんなにたくさんお金があっても、子供がいなければヌーンイリヨーネーン（なにも必要ない）〉といって、妻が妊娠しているのも知らないで、男は那覇の辻[2]へ行ったそうです。

男が辻にいりびたり十ヶ月経つ間に子供が生まれたので、使いの者が辻に行き、

「チャクシボージャーナチェンドー（嬶子がうまれたよ）」

と知らせると男はたいそう喜び、ジュリ（遊女）には何も言わずに、使いにきた人と一緒に飛んで帰ったそうです。ジュリは買い物に行っている間に男がいなくなっているのを知ると、あまりのショックのため死んでしまいました。

山原では明日の[3]四日ジールで盛大な祝いを行おうとしている日で、男は、

「ジュリを呼んできて祝いの座を盛り上げさせなさい」

と言われたので、ジュリを迎えに出向き、日が暮れかかった頃[4]嘉手納の[5]比謝矼[6]のところでマジムンになったジュリと出会いました。ジュリは、

「私をうっちゃって行くなんて、あなたは情もない。私は今、あなたの家を訪ねて行こうとしていた所なんですよ」

「すまん。私が悪かった」

と男は事情を話し謝まりました。女はだまったままでいたが、男が、

「今日は子供の祝いがあるので私の家に行って、一緒にお祝いをしてくれないか」

と言うとジュリは、

「いいですよ」

と承諾しました。男が、
「あなたは⑥天川という曲を覚えているか」
と聞くと、
「覚えています」
と答え、その曲をうたったので、今でもその地は天川と呼ばれている。
　二人が山原に着く頃には日も暮れて、家ではお客さんが沢山集まり三線が弾かれ賑わっていました。⑦ウシーマールーモーイで一人ずつ踊っているうちにジュリの番になり踊っているのを、⑧クチャ（裏座）にいる産婦が節穴から覗いて見たらジュリの胴から上は見えるが足が見えなかったそうです。驚いた妊婦は〈これはマジムンにちがいない〉と近くにいる青年を呼び、藁を持って来させ左縄（ひだりなわ）を七・五・三になわし（悪風返し）て妊婦のいる廊下に下げさせました。妻が大きな声を上げたので、男は妻がジュリに嫉妬をしていると思っていたらしいが、妻は気が気でなく夫を呼んでもらい節穴から覗かせると、インネースンネー妻の言うとおり下半身がなかったそうです。妻が、
「マジムンは鶏の声がすると逃げていくので、誰かを⑨フールに行かせ⑩クバオウギを二つ持たせバタバタ羽ばたかせながら『ケッケッレーケー』と鶏の鳴き声をさせなさい」
と言いつけ、そのようにさせるとジュリは、
「私は帰りましょうね」
と帰って行ったらしい。妻は夫にあとを追うようにいうと、
「アア、ウトゥルサヌ（なんておそろしいことを）」
といやがっていたが、
「マジムンはけっして振り返ることはないから大丈夫です」
と言うので、あとをつけてみると、マジムンはジュリ墓の方に行ったそうです。
墓の側で様子を伺ってみるとジュリが、

「ここを開けてください」
と言うと、墓の中から、
「だめだ。こんなに遅く帰ってくる者は入れない」
と言われ、
「それなら、どうしたら入れてくれるのですか」
「今日お祝いした赤ん坊の魂を取ってきたら入れてやる」
「それはどうして取るのですか」
「子供の鼻をくすぐってクシャミをさせて取りなさい。それでだめならハンドゥー（水瓶）に毒を入れて窒息させなさい」
といわれたそうです。

墓でのやりとりを聞いていた男は大変驚いて急いで家に戻り〈どうしたらよいものか〉と考えていると妻は、
「おちついてください。クシャミをしたらクスケー、二回したらメークェーといいなさい」
と教えたので、その通りにした。すると今度はひきつけをしたので、茶碗に水を入れてもって来させ、フーと息を吹きかけてから飲ましたので、マジムンは子供の魂を取ることができなかったそうです。

四日ジールーが夜通し行われるようになったのはこの伝え話しから始まり、それ以来クシャミをすると『クスケー』と言うようになったんだと・・・。

注
①山　原・・・・・沖縄本島北部の俗称。
②辻・・・・・・・那覇にあった遊郭の名。
③四日ジール・・・子供が産まれてから四日目にする産育儀礼のひとつ。ジールは床を切って作られた炉。
④嘉手納・・・・・中頭郡嘉手納町。北谷町の北に位置する。
⑤比謝矼・・・・・嘉手納町と読谷村の境を流れる比謝川にかかっていた石橋。
⑥天　川・・・・・天川は比謝矼近くにある地名。天川の曲というのは、琉球古典音楽楽曲のひとつ。

⑦ウシーマルーモーイ・・・順ぐりに踊ること。
⑧クチャ・・・・・昔の貫木屋は田の字型間取りがみられる。大方の場合、一番座、二番座と表座敷があり、その反対にある裏座敷のことで、部屋によって機能が異なる。産室と使用される部屋は、母屋の台所に近い座敷か、あるいは台所に近い裏座敷が使われた。
⑨左　縄・・・・・普通の縄は右に綯って綯うが、七・五・三に縄を左に綯って綯われる縄は清浄な区域を示すために張るとともに、魔よけとしての威力を持つときれる。
⑩フール・・・・・便所。在来のものは石畳で囲んだもので、中に豚を飼い、人糞は豚の肥料となった。
⑪クバオウギ・・・クバはビロウのことで、ヤシ科の常緑高木。それで作ったうちわのこと。
⑫クスケー・・・・クシャミをした時にいうまじないの言葉。

昭和六〇年七月八日　辺土名初美聴取　T7A7

5　塩吹き臼[ユキ]

仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

大変貧乏な家がありました。トゥシヌユールー（大晦日の晩）の日に年寄りのヨチヨチした人がやってきて、

「泊めてくれ」

といったそうです。トゥシヌユールーという日は、たとえ物乞いをする人でも人の家には泊まらないのにどうしたことだろうと思っていたが、

「行くところがないので是非泊めてくれ」

というので、

「寝る所もワラでつくるくらいのこんな家でなにもないんですがそれでもかまいませんか」

というと、その年寄りは、

「はーもーすまないが泊めてくれ」

と言うのでその年寄りは貧乏人の家に泊まることになりました。

トゥシヌユールーといっても何もないのでいろんな話をしていると、その年寄りが、

「あなたがたは貧乏でいるのに、こんな私に情をかけて下さいまして。お礼に差し上げるものはなにもないが、あなたの持っている石臼に願いごとをとなえて右や左に回すと、願ったものはなんでも出てくるので正月になったら私のいった通りにやってください」

といったそうです。

夜が明けると、昨日泊めたはずの老人がいなくなっていたので〈何も差し上げるものがないうえにこんなきたない所に泊まらせたので、きっと逃げて行ったにちがいない〉と心配していました。しばらくして、あの老人が言っていた事を思

い出し、石臼を回してみようと願い事をとなえて回すと、願い通りになんでも出てきたので〈こんな上等なものない〉と喜び石臼を大切にしていました。そうして、その家はだんだんお金持ちになってきたそうです。

ある日、そのうわさを聞いた欲張りの人がやってきて、

「おまえたちは急にお金持ちになっているがどうしたんだ」

と聞くので、かくかくしかじかと答えました。欲張りの人は、

「ちょっとその臼を貸してくれ」

というが、

「これはたいせつなものだからだめだ」

というと、

「ああ、ちょっとだけだ」

としつこくいうので貸してやりました。欲張りの人は塩がなかったので、どこに回せば塩がでるかを教えてもらい、その通りに願いをかけると臼がまわりだし、塩がたくさん出てきました。

ところが、臼は止まることなくどんどん塩を出すので、なんとか止めようとおさえるのですが、止め方を教えてもらってなかったので塩はどんどん出てあふれてしまい、それが海まで流れていったそうです。それから、海の水はからくなり、今でもその臼が海の中で回り続けているそうな……。

注　①はーもー・・・・驚いた時、感心した時に発する言葉。
②石　臼・・・・・穀物を砕いて粉にする道具。

昭和六〇年八月一二日　辺土名初美・伸松庸尚聴取　T12A17

6　登川（ぬぶんじゃー）部落の始まり（登川部落の始まりと名の由来）

平田嗣光（大正六年五月五日生）登川

昔、知花と池原の間の人里離れたところにフェーレー（追いはぎ）が出て、首里王府へ貢ぎ物を運ぶ人や、国頭からの旅人が襲われて品物を奪われることがたびたび起こったので時の王府は池原部落[1]に対して、フェーレーを取り締まるように命令を下したそうです。池原部落では村頭や役人の方々が集まり『どのような方法を取ったらいいか』と協議を重ねた結果、七名の若者をムトゥジマ[2]（この名はあとでつけられた名）に遣わすことになりました。七名の若者は昼、夜を徹してフェーレー退治につとめ、ついにフェーレーを捕まえることができ、フェーレーは首里王府に連れていかれました。

王府では、フェーレーを退治することはできたが、また出てくることもあるかと心配し、一番いいことはそこに部落を造った方が安心だということになり、七名の若者にたいして、「部落を造るように」と命令したそうです。池原から来た七名の若者は、フェーレーを退治した後王府からの命令通りその地に部落を造り住むことになりました。

人智の発達に伴い、そこが山岳地帯で土地が狭く、発展性に乏しいということになり、広い場所を求めて、元文四年（一七三九年）八月十五日に現在地に移動したが、今度は七軒では少なすぎるということになり、もう七軒を池原部落より合併させて村を造ったそうです。

新しい登川部落を造る時に、区画整理や道路、非常用水の整備等についての指導をなされた方は赤嶺親方という人で、その方の名と登川村が現在地に移住してきたことを立証する石碑[3]が、現在でも公民館の前に建立されています。

登川という名は、池原からも川を登ってくるし、東側にある兼箇段からも川を登ってくるので、のぼりかわ（登川）という名がついたそうです。

一番最初に七名の若者がすみついたところはムトゥジマと呼ばれています。そこにあるカー（泉）はムトゥガーといって、赤ちゃんが生まれると、産水といってそのカーから水を汲み赤ちゃんを清めたり、お正月には若水といって、カーの水を朝一番に汲んで来て家族みんなで、若返る意味のお祈りをしたりしていたそうです。

注　①部　落……村落のこと。
②ムトゥジマ……現登川の集落が出来る以前、池原から七軒を割いて創建し暮らした地。ムトゥジマ（元島）と呼ぶ。
③親　方……位階の名。按司に次ぐ位階で総地頭の家柄。
④石　碑……登川創立記念碑。一七世紀から一八世紀にかけて盛んに行われていた集落移動を知る上で貴重な資料。
⑤ムトゥガー……「ムトゥ」とはもとからのという意味で、登川が池原から分かれて元島（現在の北美小学校付近）に移住したときに、人々が生命の源として使用したカー。登川が現在地に移動後も拝所として崇拝している。北美小学校裏手約五〇メートル北美沢つりぼりに隣接する。

昭和六〇年九月三〇日　辺土名初美・仲松庸尚・真栄城栄子・宮城昭美聴取　T16A1

7　カフンジャー由来①

松下盛一（明治四五年五月一〇日生）池原

昔ね、山原で金持ちの夫婦がなかよく暮らしていました。

ある時、スクブ御嶽に住んでいる大将が山原に出掛けたおりに、その妻を見て好きになり、夫のもとから連れ去って行きました。残された夫は悲しさのあまりクーヤー（乞食）になり、国々をさまよい歩いていました。

ある日、スクブ御嶽の所の家で物ごいをすると、なんと、そこは自分の妻だった人の家であったそうです。男は先妻に、

「アワリソーンドー　ヤー（哀れ、悲しんでこうなっているんだよ）」

というと、先妻は寒さを防ぐための藁や筵と一緒にそっとお金を入れて持たせてやりました。男はカフン川の所で暖をとろうと思い、さっき貰った包みの中にお金が入っているともしらないで、火をつけて燃やしてしまいました。すると、燃えかすの中にお金の形をしたのが残っているので、

「フーンネーラン、カフーン　ネーランカフンジャー（果報、幸運もないね私は）」と嘆いたそうです。

そのことから、この川はカフンジャーといい、今でもそう呼ばれています。

注　①カフンジャー・・・沖縄県立美咲養護学校入り口に位置する沖縄市指定文化財の石橋。明治末期から大正の初期頃に造られたといわれ、橋の移り変わりを知るうえで貴重な建造物です。

昭和六〇年七月一日　金城茂雄・辺土名初美聴取　T6B6

8　カフンジャー由来②

島袋タケ（大正七年九月一日生）知花

これはね、あるところになかよく暮らしていた夫婦が、どうしたことか別れてしまい、女はお金持ちの人と再婚したらしいですねえ。だけど、男のほうは家々から物を貰うムヌクーヤー（物ごい・乞食）になってしまったそうなんですよ。

ある時、その男は先妻が再婚している家とはしらないで、物ごいに行くと、先妻は前夫だということに気付き、

〈①アキサミヨーウングゥトゥール　ナトーガ　ヤー（ああ、こんなかわりはてた姿になってしまって）〉とチムグルシク（気の毒）思い、暖まるように着物と、その中にお金を入れて持たせてやりました。

包みを貰った男はカフンジャーのところに来ると〈おなかも空いたことだし、何が入っているのかな〉とあけて見ると着物が入っていたので〈ああ、これは私に着なさいといって入れてくれたんだな〉と〈カフーヤ　チチヤー　カフーシドー　カフーシドー（果報がついたねえ、ありがたや、ありがたや）〉と感謝をしたので、その橋にカフンジャーという名がついたということなんだって。

注　①アキサミヨー・・・驚いた時や悲しい時、助けをもとめたりする時などに発する言葉。

昭和六一年七月九日　宮里信勇・宮城昭美聴取　T26A18

9　シーグダキクミ（シーグダキ・チャーギ由来）

島袋盛保（明治三七年一一月二六日生）知花

乞食が各字をまわりながら、

勝連浜川メンダルー[1]と桃原タルガニー[2]はお似合いだね、と話していた。すると、その話を耳にした本人たちは〈そういう人を見てみたいねえ〉とお互いに思っていたそうです。

それで、男はその女を一目見たいとおもい首里から勝連へ忍んで行ったようです。

ある日、女が男に、

「私を忍んできてくれるなら、川の水が止まる頃、戸があわさった時にきて下さい。そうすれば、ハナシムヌガタイ[3]ができますので。それに、ここに来る時には馬二頭に鞍一つを乗せてきてくださいね」

といったらしい。女は、〈あんな遠くから来るし、それに首里の人でもあるので、どれくらいのジンブン（知恵）の持ち主かねえ〉と試すつもりであったらしい。ところが、その男は案の定〈馬二頭に鞍一つを乗せるということも難しいことだが、それに自分も乗ってこいと言うし。それに、川の水が止まる頃はないのに……どういうことだ〉と悩んでいた。川の水が止まる頃というのは、道を歩く人がいなくなる頃のことをたとえていっているし、戸が合わさった頃というのは、皆が寝静まったころを意味し、馬二頭に鞍一つというのは、妊娠している馬に鞍をかけると二頭と同じだから『妊娠している馬に鞍をつけ、皆が寝静まった夜中に私に会いに来て下さいね』と言うことであったらしい。男は女の言っていることが分からなかったので、帰ってから隣近所のお年寄りに聞くと、

「こう、こういう意味だよ」

と教えてもらったそうだ。

男はお年寄りに教えられた通りに女に会いに行くと、女は約束なので戸を開けて家に入れた。すると、部屋の中のお膳に、竹とシーグ（刀）と粟御飯が準備されていたらしい。竹には抱くという意味があり、シーグは直ぐにという意味で、粟御飯は、

ユカティ　サミイニヤ　マヒルマニサチュイ（豊かに実った稲は、真昼に咲いて）
アワリ　アワヌフーヤ　ユナカサチュイ（哀れ粟の穂は、夜中に咲くよ）

といって、粟の穂は夜中に咲くといういみがあり、よってこのお膳に準備されているものの意味は『すぐにでも私をだいて欲しい』ということで結婚をしてもいいという返事であったらしい。ところが男はそうとはしらないで、《私が遠くからくるのでお腹をすかしていると思って御飯を準備していてくれたんだなあ》と勘違いして、刀で竹を割りお箸を造り御飯を食べたそうです。すると女に、

「あなたは御飯を食べにきたのですか、私が欲しくてきたのではないのですか」

といわれ、男はあまりの恥ずかしさにその場で自殺をしてしまいました。女も本当は男のことを愛していたが、試そうとして殺してしまったので、

「私が死んだらあの人の側に葬って下さい」

と言い残してその女も死んでしまいました。遺言通りに男の側に葬ってあげると、男の葬られたところからは竹が、女の葬られた所からは[1]チャーギが生えてきて、その竹がチャーギにからまったという話しです。

注　①勝連浜川メンダル！：勝連浜川は現在の中頭郡勝連町字南風。「メンダルー」は「真鍋樽」で勝連按司系統浜川按司の娘と言われている。メンダルーは絶世の美人で、髪が途方もなく長く、竿に髪をたれかけて梳いたと伝えられ、また、勝連城址の南方、海に近い森にハンガーがあり、そこで髪洗いに使ったという石壺が残っている。
②桃原タルガニー：・・・桃原は那覇市首里台地の西部に位置する。古くは御殿、殿内と呼ばれる屋敷が並んでいた。タルガニー「樽金」。
③ハナシムスガタイ：・・・よもやま話。
④チャーギ・・・いぬまき。横の一種。木材は固く淡黄白色で沖縄産の最上の用材となる。

昭和六〇年一〇月二三日　辺土名初美・下田博美聴取　T22A4

10　ヤバチャミーと行商人の勝負

島袋次郎（明治三四年四月七日生）　知花

知花にヤバチャミー、ヤバチャミー小[1]といって、たいそう武勇にすぐれた兄弟がいました。昔は田に降りる鴨を鳥もちで捕っていたので、その原料になる木の皮を取りに、弟と一緒に、山原にでかけました。鳥[2]もちの原料を採り終え、弟に担がせて家に戻る途中のことです。

山原に向かう那覇の行商人と山の中で出会いました。ヤバチャミーは小柄の身体にいつもキーフージョー（木製の煙草入れ）を下げていたので、それを見た那覇の行商人が、

「おまえは身体に似合わない大きなキーフージョーを持っているが、山原で死んだ時にその中に入るつもりか」

と言うので、

「なんだい、人の道具にケチをつけて。おまえごときのものが人のことにかまうな」

「おまえは身体にも不相応な道具を持って。そんな人間はいないぞ」

「そうかおまえは俺と喧嘩しようというのか」

「おまえごときだったらやるよ」

ということで闘うことになりました。ヤバチャミーは大きなヤマグサン（昔、山原に出掛けて戻る時は必ずヤマグサン・山杖を取って持って帰った。それは枯らすことによって薪にもなったから）を切って持っていました。行商人はクーリバク（庫裡箱・竹で編まれた箱で行商の品物を入れてあった）を持っていたのでそれを置き、

「さあ、かかってこい」

と立ち向かおうとしていました。ところがヤバチャミーは弟に加勢を頼むふうでもなく、弟も、

「今日はいい見世物ができた」

と言ってその場にかがんで見ることにしました。ヤバチャミーはフージョーから煙草を取り出して一服すると、行商人にも煙草を勧めました。しばらくして行商人が、

「武器を持っているから出してもいいか」

と聞いたので、

「どうぞ、持っているだけ全部だせ」

と言うと行商人はクーイバクの下に隠してある太刀を取り出して、

「ディートーディー（さあ、どこからでもいいからかかってこい）」

と仕掛けてきました。するとヤバチャミーはすばしっこく、持っているヤマグーサンを一瞬のうちにはねあげて行商人の腕をへし折りました。腕をへし折られた行商人は死んだふりをして動かなかったそうです。ヤバチャミーは、

「おまえみたいな小指ほどもない奴が。道ではどんな人に出会うか知れないのに喧嘩をふっかけてきて。口は災いのもとだ、気をつけろ」

と戒めました。

ヤバチャミーはどれくらいの力持ちであったかしらないが、落ちている太刀を拾い石にぶつけてへし折ったそうです。すると、弟はその折れた刀を持って帰り鎌を作り、その鎌はチバナイラナグァーといって有名になったということです。

ヤバチャミーは刀をへし折ったり、棒の先を松の木に一寸も突き刺すくらい、それくらい力持ちで、勇者であったそうな・・・。知花にいた力持ちの話でした。

注　①ヤバチャミー小・・「小」は小さいものに対する愛称の接尾語。

②鳥もち・・・・モチノキの皮を剥ぎ、米臼に入れて杵でつくともち汁が出る。さらに水洗いすると、皮がとれて鳥もちができる。小鳥や昆虫をとらえるもち。

昭和六〇年一〇月一三日　辺土名朝三聴取　T21A2

11　アフグン親方

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

真玉橋嘉数のカカズヤマーというところにアフグンの親方という大金持ちの一人息子がいました。彼はカーギシガタ（容姿）も立派だったので、女性たちのあこがれの的で、いつも女の人達と辻などで遊びふけっていました。ところが、そういう毎日にあきてしまい、魚を釣りに行くようになり、それが唯一の楽しみになっていました。

ある日、いつものように魚釣りにいくと、その日は蒸し暑いうえに魚も釣れないのでいつしかウトウト眠りこんでしまいました。すると突然夏のにわか雨がザーッと降り出してきたのでびっくりして飛び起き、隠れ家をさがしていると一軒の家を見つけました。

「すみませんが、ここでしばらくの間雨宿りをさせてもらえませんか」

とお願いすると、女の声で、

「いいですよ。どうぞお入り下さい」

と快く引き受けてくれました。それがきっかけとなり、二人は夫婦のように親しくなりました。

しばらくして女の人が身ごもり、生み月に入ると女はアフグン親方に、

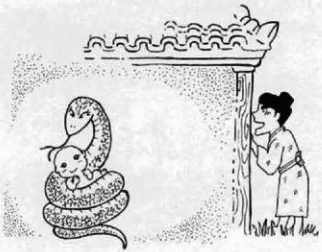
「いついつの日は子供が生まれますので、その日は来ないで、翌日に来て下さいね」

と言うと、親方は、

「ああそうか」

と約束しました。ところが親方はあまりにも愛しい人なので、いても立ってもいられず〈夕方になったから大丈夫だろう〉と思い出掛けました。

そうして、ハシルヌミー（雨戸にあいた穴）から家の中をのぞいて見ると、なんと、ヘビの姿をしたものが生まれた子



供の身体をなめまわしているではありませんか。

びっくりした親方がもう一度ミーミー（穴）からのぞくと、ヘビは親方に見られたのに気付いたのか人間の姿にもどっていました。女は子供を放して、

「どうしたんですかウンジョー（あなた）。明日来て下さいと約束したのに・」

「あなたに来るなと言われてさみしくなり、いても立ってもいられなくなって夕方なら大丈夫だろうと思ってきたんですよ」

というと、女は、

「どうぞ入って下さい」

と親方を家の中に入れたそうです。そうして、

「あなたがご覧になったように私は人間ではありませんので、この子供はあなたが育てて下さい。あなたが約束を守って下さればこの子の身体は全部鉄でまくことが出来たのに、あなたに見られたので首の部分はなめ残してしまいました。見られてしまっては今更どうすることもできませんので仕方ありません」

と首の部分だけは普通の人間と同じように肉でできていたそうです。

この子供は大きくなってウフブシ（強い武士）になりました。薩摩から戦をしかけようとしても身体が鉄でできていた為、しかけることができず困っていました。そうして薩摩が考えついた事はいつもウフブシの髭剃りをしているマカーヒンナーという人にお金をあげて、

「お前がヒゲを剃る時に彼の首に剃刀をあてて殺しなさい」

と頼みました。

マカーヒンナーは薩摩の使いの者に言われた通りに首に剃刀をあてると同時に親方はマカーヒンナーの手をつかみ立ち上がり、マカーヒンナーの両足を引き裂き片方の身体は東の海に、片方の身体は西の海に放り投げたそうです。

それからというもの海辺に住んでいる人達が節句に御馳走を作ると、そのマカーヒンナーがきてムンヌハチ②をとり、腐らせてしまうので、海辺の人達の節句はマカーヒンナーが来ない一日前に行うようになったということです。

注　①真玉橋嘉数・・・現在の豊見城の字名。
②ムンヌハチ・・・食べ物に最初に手をつけること。

昭和六一年八月七日　高江洲裕美・宮城昭美聴取　T31A3

12　ヤバチャミーとスムカタランボー

島袋次郎（明治二四年四月七日生）知花

知花にヤバチャミーというたいそう英雄な者と、どこの者かは知らないがスムカタランボーという乱暴者がいた。スムカタランボーはいつも那覇の町で肉屋から、

「これはおれのものだ」

といってただで肉をもっていったり、布売りから布を奪い取ったり、好き勝手なことをしていた。

ある日、ヤバチャミーが那覇の町で買い物をした時のことである。ヤバチャミーが豚売りから豚を買い、預けておいたのを取りに行くと、そこにスムカタランボーが来て、

「これは俺のものだ」

といって取っていった。ヤバチャミーが豚売りに、

「この豚はあの人のものらしいじゃないか。金を返せ」

というと、豚売りは、

「あの人はねスムカタランボーといって何でも人のものをただで持って行くんですよ。私はあなたに豚を売りお金を頂いたので、豚はあなたのもので、お金は私のものです」

といってお金を返さなかった。ヤバチャミーは、

「おまえは私の豚を取って、これは私のものだ返せ」

と言うと、ランボーは相手が自分の脇くらいしかないものだから、

「ヌーウーヒャー、コーサークヮーサリンドー（なんだって、げんこつくらわすぞ）」

「おまえにゲンコツをくらわされてたまるもんか」

「喧嘩はやってみないとわからんぞ」
「じゃあ、やってみるか」
ということになった。だけどヤバチャミーは、
「トートートー（さあ、さあ、さあ）、ただは喧嘩できないから公儀訴えしろ」
と言って、町の人に訴えさせた。
しばらくして公儀から役人が来たので机を準備し酒を置いて大門[2]前通りで試合をすることになった。那覇の人は、
「今日はみものだ」
といって試合場を取り囲んだ。
屠殺業者たちは『ランボーが何かしたら切り殺そう』と、包丁を研いで身構えていた。
最初、スムカタランボーは六尺の棒を持ち、ヤバチャミーはサグサン[3]（尺杖）を持っていた。ヤバチャミーはサクグサンを使うのは苦手であった。しかし、スムカタランボーの打ちつける棒は全部外していた。しばらく闘うと公儀から、
「少しは休みなさい」
と酒を渡された。ヤバチャミーは酒上戸だったので、立ったままで注がれた酒を飲みほしたがスムカタランボーはガタガタ震えて少しも飲めなかった。
ヤバチャミーが、
「スムカタランボーの酒も私に下さい」
と言うと公儀の役人は、
「試合が終わると飲ましてあげるから」
と言い聞かした。しばらくして再び立ち会うとき、ヤバチャミーは、
「私は今度はこれで」
といって六尺棒を手にすると、一瞬のうちにスムカタランボーを叩きのめした。

それからというもの、美里、知花では、
「誰もヤパチャミーには反抗するなよ」
とふれて廻ったそうだ。

注　①ヒャー・・・・・「ヒャー」をつけると感情が強調される。
②大門前通り・・・戦前の那覇市役所前から孔子廟までにいたる道路。（沖縄大百科事典）
③サクグサン・・・尺杖と訳した。尺杖は大形のものさし。馬の寸法をはかる杖。（広辞林）

昭和六〇年一〇月一三日　辺土名朝三聴取　T21A3

13　米寿由来

喜納兼増（大正二年二月一〇日生）登川

昔、神代のことである。

子、牛、寅・・・・の十二支のホシの神様たちが『何月何日生まれの人は何才まで生きる、何月何日生まれの人は何才まで生きる』というふうに、それぞれの人の生命を決めようと、いろんな国々を歩き廻っているとき、男の子を負ぶっている娘と出会いました。

老人の姿に身を変えた神様たちは、

「この子は見ためには容姿も立派で丈夫そうなんだが、長くて八才までしか生きられないねえ、かわいそうに」

と、男の子の頭を撫でながら通っていきました。びっくりした娘は子供を負ぶったままお母さんのところへ走って行き

「とてもりっぱなタンメー（おじいさん）[1]さんたちが、この子は八才までしか生きられないと言っていたがどうしようかねえ」

と言うと、お母さんは娘に、

「その人たちは何名だったの、どこに行かれたの」

と聞き、

「それじゃあ、まだ探せば見つけることができるかもしれない」

と追いかけました。前の方を歩いている人たちがいたので、

「この人たちでしたか」

「はい、そうです」

というと、お母さんは神様に、
「大変ぶしつけで申し訳ありませんが、少しのあいだ話を聞いていただけませんか」
といって、さきほど娘に聞いたことを話し、
「どうか助けてください」
と泣きながらお願いすると、
「そんなにまでいうのなら、話だけでもきいてみようじゃないか」
ということになった。
生命を決める神様で一番偉いのは[2]トゥイヌファの神様で、その神様が
「年を延ばすことはできない」
というが、残りの十一名の神様たちは、
「こんなにもお願いしているのだから少しならいいじゃないか」
というので、
「それなら、十八才までのばしてあげよう」
というとお母さんは、
「十八才まで延ばして下さいまして有り難いのですが、十八才の花盛りの年に死んでしまわれるとよけいに辛いので、もう少しのばしてください」
とお願いすると、
「これ以上はどうしてもだめだ」
と断わられた。しかし、お母さんは、
「もう、もう八という数字をつけてもらえませんか」
というと神様たちはお酒も御馳走もいただいたことだし・・・

「アンシーネーナー、ウリンカイ、ハチンディヌジータックヮーシ（それほどまでに言うのなら、それに八という字をつけなさい）」

といわれたので、ジンブンムチの（知恵のある）お母さんは十八の上に八という字をつけて、八十八才という年をもらうことができたそうです。

その時から八十八才の祝い、米寿祝いが始まったんだと・・いうことさ・・。

それに「米」という字も「八」「十」「八」の組み合わせになっているでしょう。

注　①タンメー・・・・「おじいさん」という意味で士族の言葉。
　　②トゥイヌファ・・西。方角は西。

昭和六〇年一〇月一日　宮城昭美聴取　T18A2

14　エイサーの始まり『悪払いから』

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

エイサーの始まりは知花からではないかと思う。お父さんに聞いた話だが、お父さんは昔の人から伝え話として聞いたものだと言っていた。

どういう話かというとだな・・・

シチグヮチ（盆）になると、後生の人はみんなそれぞれの家に帰るが、帰るところのない無縁仏はアジマー（十字路）で盆のウークイ（精霊送り）が済むまでユラユラして立っているそうなんだ。それを生きている人が見て驚き、病気になったり、死んだりするので『①ディー（さあ）、こんなことが度々あっては大変だから、チヂン（太鼓）や鐘を打って追い払おう、知花の人みんなでやれば、どんな悪魔も払い除けることができる』ということになり、村中の人みんな総出で『エイ、サー、エイ、サー』と言って、各家々を一軒残らず歩き回り悪払いをしたそうだ。エイというのは昔の人が使った槍のことで『エイ、サー、エイ、サー、サーサーサー』と太鼓を打ちながら行ったそうだ。

それからエイサーが始まり、その後、他の村にも伝わり、沖縄中に伝わったのではないかと思う。これはたんなる行事ではなく、悪払いからきているものだよ。

注　①ディー・・・・誘いかけるときに発する言葉。

昭和六〇年九月九日　辺土名初美聴取　T19A2

15　エイサーの始まり

仲宗根トミ（大正二年五月五日生）　登川

昔、たいそう金持ちの人がいた。『金は宝』といって貧乏者がお金を借りにきても絶対に貸さないで貯えていた。その人は病気になり亡くなったが、後生にお金を持って行くことができなかったので、後生に行ってから〈アイエー　ワージノー　ウッサキーヌジン（ああどうしよう、わたしのあんなにたくさんのお金は・・）〉とお金のことを心配していた。

子供たちが、

「私達のお父さんはお金の心配をしているということだが、これはどうしたらいいものだろうか」

と有名な坊さんのところに教えを乞いに行った。坊さんは、

「あなたのお父さんは生きているとき、お金は沢山あってもケッチンボー（ケチ）になって貧乏者に物をあげたりお金を貸すこともしないで自分一人のものだといって貯えていたが、死んでしまうとお金を後生に持っていくことができないといって、それの心配をしているので、七月のお盆の十三日、十四日、十五日の三日間のあいだ、あなたたちが御馳走を作り、お酒を準備して村中の青年を集めてもてなしなさい。そして青年たちに太鼓をボンボンさせて、あなたのお父さんが苦労している心をなぐさめてあげ、罪、とがをはらしなさい」

といわれた。そのときから①エイサーが始まったということであるが、坊さんは「あなたのもうけたお金でこのように御馳走も作り、②アシビをさせているので、あなたはお金の心配をしないでください」と三日間お祈りをした。そうして

お金の形を紙に打って打ち紙を作り、
「イチミ（この世）のお金から出してお供えしてあります。打ち紙一枚は[3]イチマングヮンとしてお使いになれますから」
といって七月十五日に打ち紙を火にあぶった。
今でも[3]スーコーに打ち紙を燃やすのは、そういう理由からだそうです。

注　①エイサー……沖縄本島で、旧暦のお盆に青年たちが、太鼓を持って踊り、家々を廻り祖霊を供養する芸能。
②アシビ……豊作を祈願して歌、三味線、踊りなどを楽しむこと。
③イチマングヮン……銭の一万貫。
④スーコー……法事。

昭和六〇年九月九日　辺土名初美聴取　T19A2

16 察度王（さっとうおう）

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

①察度王は奥間大親（おくまうふや）のチャクシ（長男）で天女の子供といわれている。

その察度王が若い頃は怠け者で、いつも魚釣りばかりしていたので色が黒く、タンヤチ（炭焼き）グラフィーとも呼ばれていた。

②勝連城のモチヅキ按司の娘にとてもきれいな人がいた。首里の侍たちは自分の嫁にしたいと思っていたらしいが、娘は、

「結婚する気はありません」

といって全然応じなかったそうです。

その噂を耳にしたタンヤチグラフィーは『私が行ったら大丈夫だ』と言って訪ねて行ったようです。ところが、城の門番になかなか取り合ってもらえません。タンヤチグラフィーは、

「私は按司に話があって訪ねてきたのに、どうして会わしてくれないんだ。まず、按司に話してみてください。もし按司が③オーといわれたら、話をしたいとおもいます」

とお願いした。門番は按司のところに行き、

「乞食のような身なりをした人が、按司にお会いしたいといって来ておりますが」

「トーマジ　アンシェー（ああ、それなら）珍しいから連れて来てみなさい」

と言われたのでタンヤチグラフィーは按司に会うことができました。そうして、

「あなたの娘を私の嫁に下さい」

と言ったようだね。すると、按司は怒ってすぐに立ち上がり、

「お前はそれを言いに来たのか」

と殺そうとすると、娘が飛び出してきて、お父さんに、
「待ってください、私をこの人の嫁にしてください」
「どうしてそのようなことを言うのだ」
「この人の身体は私から見たら光が出て見えますので、お父さんたちよりも偉い人になられるお方です」
と。（この娘も徳のある方であったわけだな）お父さんは、
「ああ、そうか」
と納得なされ、タンヤチグラフィーは、すぐその場所で着物も着替えさせられ、米を持たされて謝名村に夫婦として帰って行った。

米はタンヤチグラフィーが担いでいたが、謝名村まで遠いので道中休んだらしいね。その時に米の中に女が黄金を入れてあったのを、男は米があまりにも重たいので、『ヌー、カンシ、ウブサヌムノー（なんて、こんなに重たいんだろう）』といって、米の中をかきまわし、黄金を石だと思い、取って捨てたらしいです。

家に着いてから、米を炊いて食べようと米の中をかきまわすと、入れたはずの黄金がないので女はびっくりして、
「この中に入っていたのはどこにおいたのですか」
と聞くと、
「ヌー、アンソール（なんだ、あんな）石、わたしたちが休んだところに捨ててきたよ。重いのに持てないよ」
「あれは黄金なのに捨てたのですか」
「あんなものが黄金なのか」
「そうですよ」
「それなら早く行って取ってこよう」
と取って来た。そうして、
「これが黄金なのか。私が魚釣りをするところにたくさんあるよ」

というので、行ってみると魚釣りをするところのガマ（洞窟）に黄金が沢山あったんだって。そうして、

「これもあのガマから持ってきたものだよ」

と持ってきた枕は黄金でできていて、それを枕としていつも休んでいたんだって。

二人はガマにある黄金を全部持ってきて、大和からくる鉄と交換し、金細工を連れてきてクワやヘラ、カマを作らせて、農民に与えたということです。

注　①察　度……浦添を拠点とする王統（中山王）。
②裏間大親……浦添間切謝名村の百姓で察度の父親ともいわれる。
③勝連城……勝連町南風原にある城跡。
④オー……目下に対して承諾をあらわす語。
⑤謝名村……浦添間切謝名村のこと。

昭和六一年八月六日　宮城昭美聴取　T30A14

17　知花当石川（ちばんてーいしらやー）

川上　亀（明治二九年三月一八日生）美里

チバンテーイシチャーというウーブシ①がいらっしゃった。お墓がたくさん建っているクグシク②というところに、大昔の武士が葬られている墓があったそうです。チバンテーイシチャーという人は武士が葬られている墓の前で武勇の稽古をしたらワザが強くなると信じていたので、その墓の前の広場で毎晩武術の練習をしていました。

あるとき、チバンテーイシチャーの友達がからかってやろうと思って、墓の後ろから忍び込み、墓の上から大きな石をポンミカチ③落としたそうです。するとチバテーイシチャーは、その石が地面につかないうちに、墓の袖に六尺棒をあて、ポーンと友達がいる墓の上まで飛び上がっていたそうです。

ある日、チバンテーイシチャーが首里、那覇に向かう途中で宜野湾あたりの青年がチバンテーイシチャーをからかったので、とっつかまえて松の下に座らせておいたそうです。その人はチバーンテーイシチャーが首里、那覇で用事を済ませて帰ってくるまで動くことができず座ったままであったそうです。

注　①ウーブシ・・・・武芸、空手などに特にすぐれていること。
②クグシク・・・・沖縄市美里にある小字名。
③ポンミカチ・・・「エイ」と思いきって。

昭和六二年六月二三日　桑江良秀・宮里純子・宮城昭美聴取　T33A4・8

18　メーヌシジヌティーグヮーウスメー

川上雄善（大正一〇年一二月一七日生）美里

メーヌシジヌティーグヮーウスメーという人はカミンティー（神技）をつかわれる方で、首里の武芸を習っている人でさえも、たちうちできないくらいすごい武士であった。

その人が若い頃、越来のナーラビ（娘）と恋中であったのを、越来の青年が憎み、捕まえて①イッパーの上に手を置き、もうひとつのイッパーでたたきつぶしたので、そのときからティーグヮーと呼ばれるようになったそうです。

夏の日照りの時であるが、ごぼうをポンポン手で引き抜くくらいすごい力持ちであったので、それを見た越来の青年たちはびっくりして『この人に喧嘩をしかけたら大変だ』と恐れおののいたそうです。

ある日、ウスメーが首里に向かっているのを、浦添あたりの青年が見て、

「美里のティーグヮーウスメーは力持ちだから、この人にはむかうと大変だから、御馳走をあげてもてなそう」

と、御馳走を作り招待したそうです。ウスメーは〈御馳走を食べさせるのには、何か企みがあるかもしれない〉と思って用心していたので、御馳走を食べ終わるとゲッキツの②ヒンプンを飛び越えて家に帰ったということです。

注　①イッパー・・・・村々の村屋や遊び庭などに大小の丸い黒い石がおかれており、青年たちが力だめしをするために頭上におし上げる石。

②ヒンプン・・・・門と母屋の間に建てられた屏風状のもの。沖縄独特のもので、道路から家が丸見えにならないように視線を遮る役目があり、また悪霊の進入を防ぐ役割もある。

昭和六二年六月二二日　桑江良秀・宮里純子・宮城昭美聴取　T33A3

19　猿になった金持ち（大歳の客・猿の赤尻由来）

栄野比トヨ（大正六年一〇月一〇日生）知花

貧しいが、心のやさしい年寄りの夫婦がすんでいた。大晦日の晩、

「よその家は御馳走も作って食べているようだが、私達夫婦は年も取っているうえに食べ物もないので、ヒーソーグヮチ（火正月）しようねウスメー」

といって二人、火をたいて暖まっていた。すると、隣に住んでいるお金持ちの人が来て、

「あなたたちは食べるものがないので、火正月をしているのか」

というので、

「アンスグトゥ（だから）、そうだよ」

と話していた。

しばらくすると、今度は神様が天からおりていらっしゃって、

「サミヨー（おや、まあ）、なんて可愛そうなことだ。さあ、鍋があったらそれをきれいに洗って①カマにかけなさい」

というので、その通りに鍋を洗いカマにかけると、神様が②ジーファーのようなもので鍋に粉を入れられた。すると、鍋の片方には肉、片方には御飯が出来た。神様は、

「さあ、早く御馳走を食べて年を越しなさい、③ワカドゥシをとりなさい」

といわれたので、その御馳走を食べると二人とも、十七、八のもとの若さにもどった。

翌日、隣の金持ちの家へ行き昨夜の出来事を話し、

「それで、ほら、このように若くなったんですよ」

と言うと、

「それなら、わたしたちにも紹介してくれないか」
というので、
「それなら、時々降りていらっしゃるので、お願いしてみましょうね」
と引き受けた。そして神様が降りていらっしゃった時にそのことを話すと、
「いいよ」
と言って金持ちの家に行った。
そこの人はとても心が悪かったらしい。
神様は金持ちにも、
「さあ、お前たちも若くなりたければ①シンメーナービーを洗って湯をわかしなさい」
と湯を沸かさせ、ジーファーのカブの一杯粉をいれて湯浴びをさせた。
すると金持ちは猿になってしまったそうだ。
欲張りの金持ちが猿になったので、神様は若返った貧乏者の夫婦に、
「この家の者は猿になって山に住んでいるので、お前たちがここに住みなさい」
と二人を住まわせたそうです。すると、猿になった金持ちがしょっちゅうやって来るので困ってしまい、
「これはどうしたらいいものだろうか」
と神様に相談すると神様は、
「その猿がいつも座るところの石を焼いておきなさい。そうすると、いつものように来て座るはずだから」
といったそうだ。
そのとおりにしておくと、いつものようにやってきた猿は、その石に座ったから、さあたいへん。お尻は真っ赤に焼けて、あわてて山に逃げ込み、もう、それからは家を取り返しにこなくなったそうだ。

狼のお尻がはげたのはその時からなんだってさ・・・。

注　①カマ・・・・・カマド。昔は石三つで作っていたがのち、細かく刻んだ藁と土とこね合わせて築き、その上に鍋などをかけその下で火をたき、煮炊きするもの。

②ジーファ・・・・かんざしのこと。かんざしの一方の先が耳掻きのようにわずかな窪みになっているところをカブといい、神様がその窪みに一杯の粉を鍋に入れたことをいう。

③ワカドゥシ・・・新春を迎えて若返るという願いが込められ、年は取っても若くありますように。

④シンメーナービ・・シンメーは鍋の大きさを表す単位で鉄の延べ板を四枚合わせて作ったもの。形は円錐状で丸そこ。鍋には水が二八リットル煮沸できる。戦前は鉄製であったが、戦後はアルミニウム製が多い。主に芋を炊く時に用いた。

昭和六一年七月一〇日　宮里信勇・宮城昭美聴取　T27A8

20　カフンジャー由来

島袋盛保（明治三七年一一月二六日生）知花

とてもエーキん人（大金持ち）がいた。登川の前にスクブムイ御嶽といって（かりゆし園前・キャンプヘーグ跡にある小高い山）あるが、そのエーキん人の祝盛はスクブムイの高さと匹敵するくらいの大農家であったそうです。

粟を収穫した時に『粟のハチ』といって、一番最初に収穫したものを神様の前におそなえする習わしがあるが、その時にエーキん人のお嫁さんは自分の夫のことを重んじて『粟のハチ』を差し上げたそうです。すると、その夫は粟が嫌いだったのか知らないが、

「わたし達はこんなものを食べないといけないくらい貧乏しているのか。こんなものお前食べろ」

といって食べなかったそうです。そうしてその後、お嫁さんは家を出されてしまいました。

女は実家にも帰りづらく、タンヤチャー（炭を焼いている）の所に行ったそうです。すると炭を焼く窯の廻りには黄金が沢山あったそうですが、タンヤチャーにはそれが黄金だとは見えなかったらしいです。女はタンヤチャーに、

「私はこれこれしかじかの理由で家を出されてしまい、行くところもなく困っています。どうか、一晩泊めてもらえませんか」

と頼むと、

「こんな汚いところに寝かすわけにいかないから」

と断られました。それでも女は、

「行くところもないので、どうか泊めて下さい」

としきりに頼むので、タンヤチャーは仕方なく泊めてあげることにしました。

それを機に、二人は一緒に暮らすようになりました。炭を焼いている人だから、家といっても仮小屋みたいなものにしか住んでなかったらしいが、窯の廻りには黄金もたくさんあるものだから、だんだんお金持ちになり、松本に家、屋敷を買って暮らしていました。

女が前夫に追い出されて数十年経ったころ、前夫が乞食となって物乞いにきたそうです。男は先妻と気付かなかったそうですが、女は前夫と気付き気の毒に思い、寒いので藁の中に上等の着物二枚入れ、

「これを使う時は中を見てからにしてくださいね」

といって渡したそうです。ところが、男はあまり寒いので壕の中で（現在の市営住宅に入る所の道に自然壕があったらしく、そこはよく乞食が寝泊まりしていた）情のこもった着物が入っているとも知らず、中を見ないで火をつけて燃やしたそうです。

すると、その焼跡にきれいにたたまれた着物が灰となったのを見て『カフーシ　ヤー（ありがとうねえ）、カフーシヤー』といった言葉が川のジャーと結びついて『カフンジャー』と名がつき、いまでもそう呼ばれているんだと……。

注　①スクブムイ・・・スクブとは方言で籾殻のこと。ムイとは土が盛り上がって高くなっている所。

②粟のハチ・・・ハチとはその年に始めて収穫された粟のこと。

昭和六二年一〇月二六日　宮城昭美聴取　T40A11-B面

21　柳節の始まり（柳節の由来）

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

トー（中国）の国王の娘にきれいな人がいました。王の娘であるためか嫁に貰う人が誰もいなかったので娘は花売りに身をやつし、自ら自分の夫となる人を探しに出かけました。

娘は自分の住んでいるところからずっと遠い田舎に出かけて行き、三人の若者が勉強している所で、

「花を買ってください、花を買ってください」

と声をかけていました。三人の若者は、

「花売りがきているぞ」

といって出てきたそうです。その中の二人の若者は金持ちの息子で、残りの一人は貧しい家の出であったそうです。金持ちの息子二人は花売りがいる間ずっとそこにいて、

「アンシ　チュラサヌ花ヤ（何てきれいな花なんだろう）」

とひやかしてばかりいました。

貧しい家の若者は先に戻っていましたが、二人がなかなか帰ってこないので、また出て行き、

「お前たちは花を買う気があるのなら早く買えばいいのに、商売の邪魔をして」

と言うと、

「なに言うか、貧乏者のくせに」

と言われたので、貧乏者の家の子は戻って行って勉強をしていたそうです。しばらくして娘は金持ちの息子に、

「あの人の家はどの辺りですか」

と尋ね、

「どこそこですよ」
と教えてもらうと、娘はその若者が戻ってくるのを待ち受けていました。そうして若者がくると娘は、
「実は私は花売りではありません。自分の夫となる人を探しにきているのですが、その人はあなたです」
と言うと若者は、
「ああそうか。だけど、わたしはとても貧しいものですよ。貧しいが学問が好きなのであああやって勉強をしに行っているのですよ」
というと、
「それでもかまいません、貧乏でもかまいません」
と言うので、
「それなら私の家に行こう」
と連れ立ちました。
翌日学校に行くと貧乏者の若者は、
「昨日来ていた花売りの娘は私の妻になる人だよ」
と言うと、
「私達でさえも妻にすることができないのになにを言うか、こいつめ」
と・・・言い合いになりお互い言い分をゆずらないので、しまいには命をかけるはめになりました。
「それなら数ケ月後にあなたの妻にならなければお前の命をもらうがそれでいいんだな」
「それでかまわない。そのかわりあの娘が私の妻になったらお前たちの首を切るがそれでもいいんだな」
「いいよ」

ということになりました。

数ケ月経ち約束の日がきたが若者のところに娘はきていません。ちまたでは、

「今日はどこそこでクビガーキー（首をかけたかけ）があるんだってよ」

という噂が流れていました。そのことを耳にした娘は〈ナー　イチデージ　ナタン（ああ、大変なことになってしまった）私の夫になる人を殺されたら大変だ〉と一目散にかけていきました。そうして危うく殺されようとするところで間に合い、若者は助かったが賭にやぶれた二人は殺されてしまいました。

その後、殺された二人が賭に勝った若者の所にヤナムン（悪霊）になって出てきたので妻が、

柳はみどり
花は紅
人はただ情

と歌を歌うとヤナムンは退散したということです。

この歌の囃子にエイヤー、エイヤーとある『エイ』というのは槍のことで、槍で突き刺してあげようという意味で、ユリティク、ユリティクというのは、寄ってきたらティク（てこ）でやっつけてあげようという意味だそうです。

「柳節」はこの娘がヤナムン避けに作った歌が始まりであるそうな・・・。

注　①柳　節・・・・・・天川節とともに組曲として演奏される古典音楽。雛曲で古くは魔除けの歌として歌われた。

昭和六二年九月一〇日　宮城昭美聴取　T39A2

22　歌う骸骨

島袋盛保（明治三七年一一月二六日生）知花

昔、侍というものは田舎にいる人より躾が厳しかったが、それにもまして首里の士族は大変厳しかった。士族の娘がいたが、娘は外にでるということはめったにありませんでした。

年頃になると娘は、そこに雇われている下男と恋仲になったそうです。するとそのことが親戚に知れ、娘は親戚会議にかけられることになったそうです。娘は、

「皆にこんなふうにされるよりは、死んだほうがいい」

といって屋敷のすみっこに行って自殺し果てたそうです。（昔の侍の屋敷は広かったので、下男らも屋敷のすみずみまで掃除をすることはなかった）家のものは娘の身体が白骨化するまで誰一人として娘の死を知るものはいなかったそうです（人が亡くなると普通ならナーチャミー①とかミッチャミーといってお墓に行き、お花や水をそなえるが、そういうことをしてくれる人もいなかった）

そんなある日、毎日同じ道を通って町に出かけていたサンカという馬ムチャーがいつものように歩いていると、姿は見えないがどこからともなく、

北風（にしかじ）んすぎわ　み髪んやむい
サンカ②水ふさや　かんがあゆら

という歌が聞こえてきたそうです。不思議に思った馬引きがその事を屋敷の人に告げて、みんなで探してみると、白骨化した頭蓋骨がマータク（竹）の先に持ち上げられているのが見つかったそうです。

白骨化した頭蓋骨は、

『こんなふうに風にゆられカラカラになってしまったが、誰一人として私に水をあげる者もいない。だから、早く私を見つけて下さい』

といわんばかりに見えたそうです。

北風んすぎわ　み髪んやむい

サンカ水ふさや　かんがあゆら

（北風が吹くと風に吹かれてあっちこっちにカラカラゆれて頭もいたいが、死に水を欲しがる気持ちはこんなものであろうか）という気持ちが魂の声となって人の耳に届けたのでしょう。

それからというもの、士族は若者にあまり厳しくしなくなり、屋敷の角には（マータクのおかげで娘を見つけることができたということで）必ずマータク（竹）を植えるようになったということです。

注　①ナーチャミー・・・葬式の翌朝早々と墓参りする行事で、死者が蘇生してないかどうかを確かめるためと言われている。

②サンカ水・・・「琉球史辞典」では「死に水」と訳しているので、それに準じた。

昭和六〇年九月九日　仲松庸尚聴取　T20A12

【広報おきなわ】

23　イシザルとジジョー

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

ユーヌハジマイヤクングトゥーヤタンディ（昔、世の始まりはこんなだったんだって）・・・。

神の世のことだが・・・イシザルという人が岩から生まれたが、首だけ出ていて、体は岩の中に入ったままであった。イシザルが生まれてから二百年経った頃、今度はジジョーという人が土から生まれた。だが、その人も首だけ地上に出ていて、体は土の中に入ったままであった。

イシザルが生まれ、ジジョーが生まれてから、さらに百年経った頃、どうしたことか、ジジョーがムクムクと土をおし上げ、地上に出ることができた。ジジョーは〈ヒルマシームン（珍しいことだ）〉と思いながら、歩きまわっていた。

すると、どこからともなく、

「ジジョーヘイ、ジジョーヘイ」

と呼ぶ声がするので、あたりを見渡してみると、岩から首だけ出している人が、

「私も外に出たいので手伝ってくれないか」

と言った。ジジョーは、

「いいよ」

と答え、岩を割ってイシザルを出してあげた。

地上に出ることのできた二人は座って、

「どこかいい場所に国を造ろうね」
と話し合い、いい場所を求めて歩き始めた。
しばらくして国造りに良い場所を見つけた。するとジジョーがイシザルに、
「あなたは生まれてから二百年以上も経っているので、先に国造りをして下さい」
と言うと、イシザルは、
「いや、私はまた別のところを探すから、あなたがそこに国造りをしなさい」
と、最初見つけた場所はジジョーに譲り、イシザルはまた国造りに良い場所を求めて旅に出ました。
我々東洋人はジジョーの子孫になり、西洋人はイシザルの子孫になるそうです。なぜなら、土から生まれたジジョーは土の色をしていて東洋人の肌の色に似ているし、石から生まれたイシザルは色が白くて西洋人の肌の色に似ているでしょう。そういうことから、我々はジジョーの子孫で、西洋人はイシザルの子孫になるということです。

昭和六一年八月六日　宮城昭美聴取　T30A10

24　阿麻和利と鬼大城

島袋盛保（明治三七年一一月二六日生）知花

①阿麻和利は七歳になるまで歩くことができませんでした。昔は食べ物も少なかったので、『こんなやつは世間の邪魔になるから』と山に捨てられましたが、母親はチムヌシヌバラン（みるにしのびなく）、毎日、わが子のところへ食べ物を運んでいました。

阿麻和利は体は弱いがジンブンムチ（知恵者）でした。ある日、クモが巣を作っているのを見てヒントを得、網を生み出しました。

そうやって、だんだん体も丈夫になると、②泡瀬の海で自分の作った網で魚を捕り、とった魚はそこの住民にあげていました。

阿麻和利は〈勝連の按司になろう〉と思っていました。そこで、なんとかして城の中に入ろうと考え、

「草刈りでもいいですから働かせてください」

とお願いして、城で働くことになりました。

城内の様子が分かってくると、以前に魚を分けて与えていた住民に、定めた日に③テー火を持って海岸に出るようにお願いしました。そうして、按司に、

「④首里から戦が押し寄せてきますよ」

と知らせると、

「そんなバカなことがあるか」

というので、

「それなら見て下さい」
と按司を物見台に登って見させ、その隙に後ろから押して殺してしまいました。
勝連城の城主となった阿麻和利は、今度は中城を攻め落とそうと考えていました。ところが、それを察した鬼大城は、〈そんなことをさせてはいけない〉と思い、首里に知らせようと勝連城の崖の上に二反の布をくくりつけ、奥さんと子を負ぶり、そこから降りて逃げました。
すると、タケバルのところで阿麻和利の軍に追いつかれてしまったので、鬼大城は、
「私のしていることが誠のことであるなら、暴風を起こして下さい」
と祈ると暴風が起りました。〈後、そこはウガンガーヌニーと呼ばれるようになった〉無事に首里城に辿り着くことができたものの、暴風のため敵か味方か区別がつかないので、城の門は開けてくれませんでした。
鬼大城は親子をそこに残し、自分は故郷に帰ってきました。
追手は鬼大城を悪者だと思い追い詰め、ウフンダカリ村の七軒の家を壊して焼き殺しました。
後に、鬼大城が自分の指を切って事のいきさつを記した書きつけが残っていたので疑いがはれ、墓と碑文が建てられ祀られるようになりました。
鬼大城の墓は、知花城の崖下にひっそりと建てられています。

注

①阿麻和利・・・・十五世紀頃の勝連城主。大城賢勇らの中山王の軍に滅ぼされた。
②泡瀬・・・・・・沖縄市の字。中城湾に突出する半島に位置する。
③勝連・・・・・・本島中部の東海岸、勝連半島に位置する。
④テー火・・・・・たいまつの火。
⑤首里・・・・・・現在の那覇市首里。王府の所在地。
⑥勝連城・・・・・与勝半島の中央部勝連町南風原にある。尚泰久王時代、勝連按司、阿麻和利の居城であった。
⑦中城・・・・・・沖縄本島中部に位置する。十五世紀初期から中期にかけて護佐丸によって築城された城、中城城がある。
⑧鬼大城・・・・・栄野比大屋久の子。尚泰久王に仕えた武将。王女百度踏揚の守り役として勝連城に行くが、阿麻和利の謀反を知り、勝連城を脱出した後に、勝連城を攻めて勲功を立て、後、越来城主となった。墓は知花城にある。
⑨奥さん・・・・・百度踏揚のこと。琉球王尚泰久の王女で勝連阿麻和利の妻。後に、鬼大城に嫁ぐ。
⑩タケバル・・・・沖縄市の字高原のこと。
⑪ウガンガーヌニー・・鬼大城と百度踏揚が勝連城から首里へ逃げる時、追っ手の勝連軍においつかれそうになった時に祈りをすると、その祈りがかなえられた場所であることからその名がついたと言われてる。また、雨乞いの祭りをしたことから、「雨城ムイ」とも言われ、大里の拝所になっている（タキバルウガン）。
⑫ウフンダカリ村・・知花城との中間あたりの集落のこと。現在は知花にくみこまれている。

昭和六〇年一〇月一三日　辺土名初美・島袋芳敏・下田博美　聴取　T22A1

25　侍の牛

久場政三（明治四三年七月二五日生）園田

昔、あるところに侍がとても立派な牛を飼っていました。

そのことを聞きつけたある牛[1]バクヨー（博労）が、牛を買い求めに侍のところへ行きましたが、なかなかその牛を譲ってはくれませんでした。

それで、牛バクヨーどうしが集まり、

「あの侍は私が何度足を運んでも牛を譲ってくれないので、今度はおまえが行って牛の口を開けて・・・それで・・・牛を買ってこい」

と相談をして行かせました。

言われた牛バクヨーは侍の家に着くと、皆と打ち合わせたとおりに牛小屋から牛を出して口を開けて見ました。そして、

「[2]トートートー、こんな牛を買うわけにはいかないので牛小屋にかえしておきましょう」

と言うと、侍は、

「ヌーガ、ヌーヤガ（何！どうしたのかね）」

と聞くので、

「あなたの牛はカタヒチムン（かたわ）なので、買うわけにはいきません」

「ヌーガ、チャングトゥーソーガ（なにが、どうなっているのかね）」

と言われて、牛バクヨーは待ってましたとばかりに、

「この牛には上の歯がありません。もし、この牛を欲しいという人がいれば早く売ってしまったほうがいいですよ」

と言って、帰りました。そうして、すぐにもう一人の牛バクヨーを侍のもとに行かせ、半分の値段で牛を買ってきたということです。

牛はもともと上の歯はないが、侍は牛を飼った経験もなく、ましてや牛の口など開けて見たことがなかったので、牛バクヨーにジンブンスープ（知恵くらべ）で負けたということです。ところでみなさんは、牛には上の歯がないということを知っていましたかな・・・。

注　①牛バクヨー・・・家畜売買を生業とする者。
②トートートー・・・人をせき立てるときや、驚いたり、当惑したときに発する言葉。ここでは「もういいです」という意味が込められている。

昭和六〇年一一月二七日　金城茂雄・宮城利旭・辺土名初美・宮城昭美聴取　T42B2

26　子育て幽霊

辺土名ナベ（明治三七年五月一〇日生）池原

昔、あるところで妊娠している人が亡くなったので、お腹の子供も一緒にお墓に葬ったそうです。

すると、墓の中でお腹の子供が生まれたので、母親はその子のために毎晩同じ時刻に、同じ店に食べ物を買いに行っていました。

ところが不思議なことです。店の主人が女からお金を受け取る時は確かに本当のお金だが、女が去った後に銭箱を見ると入れたはずのお金がないではありませんか。不思議に思った店の主人は、〈ヒルマシームン（珍しいことだ）、今度あの女がきたら、お金を水につけてみよう〉と思い、傍に水を準備して待っていました。

案の定、次の日も女は同じ時刻にやってきたので、主人は女から受け取ったお金を早速水につけてみました。するとどうでしょう、お金が打ち紙に変わってしまったそうです。びっくりした主人は、〈これにはきっと深いわけがあるにちがいない〉と思い、

「ねえ、あなたはいつもそうやってくるが、何かわけがありそうですね」

と聞くと、

「実は私はどこそこの者ですが、後生で子供が生まれてしまい、子供のためにこうして食べ物を求めにやってきているのですよ。どうか、私の家に行ってそう話してもらえませんでしょうか」

そのことを聞いた店の主人は、

「よし、よし、私が何とかいたしましょう」

と約束して、女の家を訪ねて行き、これまでのいきさつを話しました。

女の家の人たちはその話を聞くとすぐに墓に行き、開けてみました。すると、子供は元気に生きていたそうです。

そのようなことがあってからというものは、死者を墓に葬った後に三日間お墓参りをする「②ミッチャミー」が始まり、妊婦を葬る時は③ウーブシやシーグ（刀）を一緒に入れるようにと言われ、行われるようになったということです。

注　①打ち紙・・・・・焼香やお盆の祖霊送りのときなどに、死者の供養に本物のお金に代えて燃やす紙製の銭。黄色の薄い紙に銭型をつけたもので、あの世のお金ともいわれている。以前は店でウチカビを買って、それにウチカビウッチャーと称するもので縦七個、横七個に打って使用していたが、現在では打たれたものが店で用意されている。

②ミッチャミー・・・死者がもしや蘇生することはないかと翌日見に親族などが墓参りすること。翌日に行くことを「ナーチャミー」というが、ここでは「ミッチャミー」といっているので、三日目に墓参りをすることであろうか。

③ウーブシ・・・ウーブシは苧糸（芭蕉の糸）でヘソの緒を結ぶものではないかと思われる。シーグを入れるのはヘソの緒を切るためのもの。

昭和六〇年七月二九日　辺土名初美・仲松庸尚聴取　T8B2

27　アジャナの兄弟

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

松本[1]に嫡子は安謝名（あじゃな）の仁比屋（にひゃー）、次男はアジャナのニヒャーグヮーというウフブシ（武勇にすぐれている者）の兄弟がいた。この兄弟は西からくる敵、東から来る敵をやっつけていたので、松本はいつも平和であった。

ある時・・・

「イクサヌ　チュンドー（敵がおしよせてくるぞー）」

という知らせがきたので、お兄さんのニヒャーは、お茶を一杯だけ飲んですぐに出掛けていったが、弟のニヒャーグヮーはお茶を二杯飲んでから出掛けていった。

白川から[2]パシクブー[3]にある川を[4]タビグムイというが、そこには赤[5]タビ（水の中に生息、茎が赤い）がたくさん生えていた。そこで、ンジュヌミジヌ　ハイヌアタイ（溝の水が流れるくらい）押し寄せてくる敵をやっつけていた。そうして、しまいには大将同士の戦いになってなかなか決着がつかないでいると、赤タビの中に倒れていた人が這って出てきて、お兄さんに切りつけた。

傷ついた兄はパシクブーアジャヌクビリ[2]に逃げて行った。そこへ、弟のニヒャーグヮーが来たので、

「ヘークナー　クーヨー（早く来なさい）」

と呼んでいるのだが、耳も不自由だったせいもあってか『ヒンギリヨー（逃げなさい）』と合図しているものと聞き違いして逃げて行ったので、無

残にもお兄さんはアジャヌクビリで最後を遂げたということです。

こんなことがあってから「お茶は二杯飲んでからでかけるものだよ」といわれるようになったということです。どんな災難もお茶を飲む間に逃げてゆき、難をのがれることができるんだと・・・。

この兄弟が使っていた太刀箱が現在でも松本の金城五郎（屋号・アジャナ）さん宅に残っています。

注　①松　本・・・・沖縄市の字。
②アジャナ・・・・屋号。
③臼　川・・・・沖縄市の字。もとは越来村大工廻の一部。第二次世界大戦後、全域が米軍基地に接収され、住民は各地に離散した。（地名大辞典）
④バシクブー・・・現在のコザ自動車学校北側一帯。
⑤タビグムイ・・・知花十字路より嘉手納向け第三ゲート手前に架かっている橋の左側にあったクムイ（池・沼）のこと。
⑥赤タビ・・・・・和名オオサクラタデ。
⑦アジャヌクビリ・・美里パークレーンズ北側一帯の地名。

昭和六一年八月六日　宮城昭美聴取　T30B2

28　カシチー由来①

新里八十孫（大正元年八月一〇日生）知花

ねえ、おばー、

「トゥカガシチー[2]にグシチジャン　クンジュシェー　ヌーヌ　イミエーヤガ（旧の九月十日にススキをとってきて結び、屋敷の門の入り口と家の四隅にたてるのは、どういう意味なんですか」

と聞くと、おばあさんは、私も子供のころに聞いたことだが・・・

むかしの墓というものは、現在のようにセメントで奇麗にしてあるものではなくて、自然の石を利用してつくっていた。

そのむかしのこと、ある三人の農夫が草刈りに出掛けたときの話です。

三人が草を刈っていると、急に大雨が降り出してきたので、お墓のアマハジ（雨端）のところで、お墓の入口を背にして雨宿りをしていたそうです。

すると、なにか髪の毛を引っ張る者がいるので、後ろを振り返って見たが誰もいない。気のせいかと思い、そのまま立っていると、また髪の毛を引っ張るので、

「ヒルマシームン（ふしぎだなあ）、だれかが私の髪の毛を引っ張っているようだが」

と言うと、

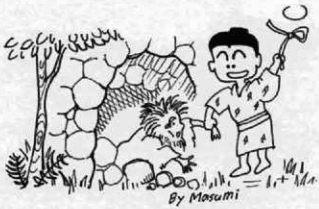
「ねえ、あなたたちは草刈りにきた人ですか」

とお墓の中から声がした。びっくりした三人が、

「はい」

と答えると・・・

「聞いてください。私はどこそこの者ですが、私は死んだと思われてお墓に葬られた



が、このように生きているので、誰か私の家を訪ねていって、わけを話してもらえませんか」と言うので、三人は早速その人の家を訪ねて行き、これまでのいきさつを話した。

すると、そこの家のものは、すぐにお墓に行き、墓を開けて出してあげた。その時にグシチジャン（ススキ）を結び、三回まわして出したそうです。

旧の九月十日にグシチジャンを結ぶのはその時から始まったんだと。

注　①カシチー・・・・カシチーとは方言でおこわ（強飯）のこと。その年に収穫された新米でカシチーを作り仏壇や火之神に供え、米の収穫を喜び感謝する行事です。

②グシチ・・・・・グシチはススキのこと。ススキを束ね結び作る。魔よけの呪具。

昭和六〇年一〇月一三日　宮城昭美・崎原由美子聴取　T21B1

29　名護親方（名護親方と雀の言葉）

喜納　兼正（明治四二年九月二六日生）　登川

①名護親方（うえーかた）は②ウマリダカサンといわれ、普通の人と変わって何でもよく知っていた。

ある時のこと、③ウェーカタは、家の修理をしようと材木を買っておいていた。そうして家の修理が始まったが、大工たちが毎晩材木を盗んでいっていたので、材木をどんなに買い足しても、

「まだ、足りませんね」

と、いつも不足といわれた。

ウェーカタは、それをみなくてもよく知っていた。でも、けっしてことばに出してせめるようなことはしなかったそうだ。

ある日、ウェーカタが来られ、クラーグヮー（すずめ）を見て、

「おまえたち、あのクラーがなにを話しているかわかるかね」

といった。すると、

「わかりません。なんていっているのですか」

と大工たちが聞くと、

「あのクラーグヮーはな、明日の何時に④真玉橋で米を積んだ馬が荷くずれをして米がこぼれているから食べにいこうねと話しているんだよ。うそだと思うのなら、クラーグヮーを取って印をつけておきなさい。そうしたら、この雀だったとわかるからな」

と言った。クラーグヮーの下あごに黒い毛が生えているのは、その時からの印だ

そうだ。

翌日、一人の大工が真玉橋に行ってみると、米を乗せた馬が荷くずれをしたところで、昨日印をつけたクラーグヮーが米をつついて食べていた。それを見てビックリして帰ってきた大工が、そのことを他の大工に告げると、〈ウェーカタは我々が材木を盗んだことを、もう、すでに知っておられるかもしれぬ〉と思い、その夜のうちに持ち運んだ材木をすべてかえしておいたそうだ。そうしたら、今度は材料が余るほどあったそうだ。

それからというもの、〈ウェーカタは何んでもよく知っているので、この人の前で泥棒でもしようものなら大変だ〉と言っていたんだとさ・・・。

注　①名護親方・・・程順則のこと（一六六三―一七三四年）。久米村程氏の七世。二二才に通事として中国に渡り朱子学、詩文の研究をし、帰国して久米村の講解氏となる。三司官に上り一七二八年名護間切の総地頭職となる。儒教道徳の鼓吹くにつとめ、実践道徳家として人々の尊敬を受け、名護聖人と呼ばれた。

②ウマリダカサン・・・尊く霊力高く生まれること。予言をしたり、神がかりなことをしたりする、霊力をそなえた生まれ。

③ウェーカタ・・・親方。位階の名。按司につぐ位階で総地頭の家柄。

④真玉橋・・・・・沖縄本島南部豊見城村字真玉橋。那覇港に注ぐ国場川下流の左岸に位置する橋。尚真王時代の創建で、首里と南部（島尻）を結ぶ交通上の要路になっていた。

昭和六〇年一〇月一日　辺土名初美聴取　T17A18

30　歌・三線の始まり（かぎやで風）

島袋次郎（明治三四年四月七日生）　知花

昔、御主加那志がいらっしゃるころに、夜の八時頃になると、シチマジムンがきて、ランプにおおいかぶさり真っ暗にするので、坊さんを頼んでお経をよんでもらうのだが、なかなかシチマジムンを退治することができなかったそうです。辻に向かう途中の坂下で三人の三味線弾きが、そのことを耳にしていたらしく、

「今度ばかりは御主加那志の命もシチマジムンにとられて死んでしまうんだなと心配しているそうだが、歌三節では退治できるものを、どうして御主加那志はそんなに心配なさるのかねえ」

という話をしていたそうです。すると、そのことを近くで馬の草刈りをしていた人が聞いていたらしく、急いで首里城に戻り、事のいきさつを話したそうです。すると、

「これから追いかけても間に合うか」

「はい、大丈夫です」

と答えると、

「それならすぐに馬に乗り、その人達をお連れしなさい」

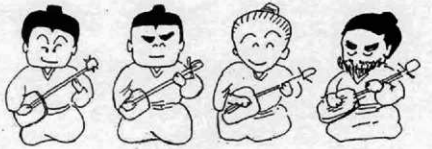
と言われたので、草刈の人はすぐに馬に乗り三人の後を追い、首里城に連れてきました。

首里城では三人のために御馳走が準備されていました。三人は三味線のチンダミ（調弦）をしてから御馳走をいただき、マジムンの出る時間を待っていました。夜の八時頃になると、けむりのような黒いものがあたりを被い真っ暗にしたので、三人はすぐに三味線をとり、

百八ヌタマ　チリティ　ヌクピケージ
イカナ　シチヤティン　ドゥチードゥ　サビル
（歌意＝国王が亡くなろうとするくらい一大事な時なので、たとえマジムンであろうと避けてくださるであろう。）

と、その歌を三回歌うと、二回目からはだんだん辺りが明るくなってきました。
その時から沖縄ではお祝いの場所では必ず『魔除け』として歌・三味線が弾かれるようになったんだって。

注　①御主加那志・・・琉球国王に対する敬称。加那志は尊敬の意を表す接尾語。
②シチマジムン・・・魔物の名＝魔物の中でもっともおそろしいもの。天まで届いたり、地面一杯に広がる得体の知れないもの。
③辻・・・・・・・・・那覇市の字。辻には王府時代に出来た遊郭があり、昭和一九年十・十空襲まで続いた。那覇には、辻・中島・渡地の三つの遊郭があり、辻が高級で中島は首里那覇相手、渡地はいなか相手とそれぞれ客層が異なっていた。
④坂　下・・・・・・・現在の都ホテルから安里三叉路に向かう道のこと。方言ではサカシチャという。行政区名は松川になっている。
⑤節・・・・・・・・・音楽の曲節・メロディー。
⑥百八ヌタマ・・・百八の玉とは祝女が所有する水晶のことで、ここでは国王にたとえている。



昭和六一年八月七日　高江洲裕美・宮城昭美聴取　T31B10

31　鬼餅由来

東　シズエ（明四〇年六月二五日生）池原

首里に侍の夫婦がいたが、お互いに気があわなかった。ある日のこと、男が悪だくみをして、

「浜遊びをしよう」

と女を誘いました。小さい船で海に出て、海の真ん中くらいにくるとわざと船をひっくり返して女を海の中へ落としました。

ところが女は助かり、人の住んでいない島にたどりつきました。そこで女はあらゆる生き物を食べて生きながらえていたそうです。

女の兄弟が、妹が無人島で生きていることをうわさに聞くと男の所に行き、

「私の妹は無人島で生きているらしいよ」

と話しました。男は、へへー　ヒルマシームン（ふしぎだな）、海に捨てたはずなのに生きていたのか）と心の中で不思議がっていました。

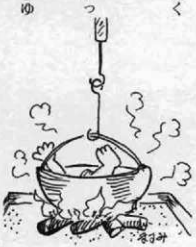
無人島で生きている女は、海に漁に来る人をおびきよせては殺して食べているというので、女の男兄弟が、

「そんな人間を生かしていてはいけない。チャーサラーシムガヤー（どうしたらいいものだろうか）」

とみんなで考えていました。

「これは、小さいときはとてもお餅が好きだったので、お餅をたくさんこしらえて、それをたらふく食べさせて寝かし、そのすきに殺そうではないか」

ということになり、お餅をこしらえて、女の住んでいる島へ行きました。女は気がふれているし、自分の兄弟であるのか、



なんなのかわからなくなってしまっているので、もしかしたら食べられるかもしれないと、おそるおそる、

「私はあなたの弟のだれ、だれだよ」

と怖い気持ちを押さえて言いました。

そうして、作ってきた餅を女に投げてあげました。女は餅を腹いっぱい食べると、案の定、寝てしまったので、それ今のうちだといわんばかりに、

「グワーッ」

と行って、女を殺しました。

それから後は旧の十二月八日に『①ウナームーチー』『②カリームーチー』といって餅を作り、③カヤブチヤーの出入り口にはカーサを十字に結んだものを吊るすようになったんだって。

（これは、鬼が家の中に入ってこないようにという魔除けの意味があるそうです。）

注　①ウナームーチー・・・鬼になった姉（ウナイ）を退治することができたことから、その名がついたと思われる。
②カリームーチー・・・縁起のよい餅。
③カヤブチヤー・・・茅ぶきの家。

昭和五五年五月一八日　大熊亨・西銘千恵美聴取　T３B13

32　大歳の客（猿長者）

幸島マツ（明治四二年一月二五日生）池原

年の夜の晩、大きな袋を担いだたいそう身なりのきたない人が、金持ちの家に行き、
「一晩泊めてもらえませんか」
とお願いすると、
「今日は年の夜でもあるので、泊めることはできませんね」
と断わられたそうです。しかたがないので戻って行って、貧乏人の小さい家に行って、
「今日一晩私を泊めてもらえませんか」
とお願いすると、
「私達はヒンスー（貧乏）で、正月というのに肉もなければ、米もなく、火を燃やして火正月をしているんですよ」
と、じいさんとばあさんが答えたそうです。すると、
「それでもよいですから泊めて下さい」
「家もきたないところで食べ物もなにもなくて火正月ですが、それでもよければ泊まっていいですよ」
といって泊めてあげた。その人は「福の神」であられた。
福の神が、
「私が帰る時にあなたたちに薬をあげるから、これを鍋に入れなさいね」
といわれた。そして、
「あなたたちが一番欲しいのはなんですか」

と聞かれたので、
「若返りたい」
と答えると、
「お湯を沸かしてその薬を入れ、浴びなさい」
と若返る薬も下さった。
福の神が帰られてから、言われた通りに鍋に水を入れ沸かしてから、もらった薬を入れると、お肉や御飯ができたそうです。そうして、もう一つの薬をお湯にとかして浴びると、じいさんとばあさんはもとの一七、八才の若さにもどったそうです。
隣の金持ちの人が、
「あい、あなたたちはエーキ（金持ち）にもなり、食べ物もたくさんあるうえに若返ったのはどうしてか」
とわけを聞いたそうです。すると、じいさんとばあさんは、
「きのう泊られた方がわたしたちを若くしてくださったんですよ」
と話すと、
「その方はどこのほうにいかれたのですか」
と聞いて、後を追いかけて行った。そうして、貧乏者のじいさん、ばあさんがやったように家に泊めて、湯を沸かして浴びると、そこの家の人は猿になったそうです。それから後、じいさんばあさんの家に、
「私の家を返せ」
と毎日くるので、猿がいつも座るところの石を焼いておいた。すると、その猿がそこに座り尻が焼けてしまったそうだ。猿の尻が赤くなったのはその時からなんだってさ。

注　①火正月……何の食べ物もない貧窮した人の正月のことをいう。

昭和五五年五月一八日　仲松庸尚・安里和子聴取　T4B9

33　十二支由来

仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）　登川

国の始まり、神様が、
「動物の年号（十二支）の一番最初は何から始めたらよいか決めるので、動物みんなに集まるように」
というおふれを出しました。その連絡係を、
「あなたは勢力も強いから、みんなに伝えるように」
と寅にお願いすると、
「いいですよ」
と快く引き受けました。
神様と寅のやりとりを側で聞いていたネズミは、話がおわるやいなや寅のところへ行き、番付の相談をすると、寅は、
「牛は大きいので、なんとか一番にしてあげたい」
というので、ネズミは今度は急いで牛のところへ行きました。そうして、
「あなたはまだわからないかもしれないが、明日動物の番付があり、神様の前に最初に行くものが一番になるのでいこう」
というと、牛は、
「ああそうか、それならば・・」
といってネズミと一緒に出掛けました。ネズミは小さいので牛と一緒に歩くことができないので、牛の角につかまって行ったそうです。
牛は先頭で神様の前に最初に着いたので自分が一番だと思っていたら、ネズミ

が牛の角から前に飛び下りたので神様が、

「誰が一番にきたか」

と聞くと、ネズミが、

「私が一番先で、牛は二番です」

と答えたそうです。

牛はやむをえないから二番になり、寅はゆっくり来たので三番目になりました。最後のイノシシは、〈自分は駆けるのも早いのでゆっくり行っても一番になれるだろう〉と思って、一眠りしたため、寝過ごしてしまい最後になったということです。そのことから『ウヮーヌ　ニンジュンネー（豚のように寝る）』という言葉が生まれたそうです。

猫は〈ネズミのやつ、いつも同じ家に住んでいるのに、私には知らせないで牛と一緒に行ったな。きさまのようなやつは食い殺してやる〉と、その時から猫はネズミに恨みをもち、食い殺すようになったんだと・・・さ。

注　①十二支・・・・・年月日や方角、時刻をあらわすのに使った動物の名前。中国ではじまったもの。

②ウヮーヌ　ニンジュンネー・・ぐうたら寝ている人のことをたとえて言う時に使う。

昭和六〇年八月一二日　辺土名初美・仲松庸尚聴取　T12A18～B面

34　蛇婿入（蛇婿入り）

高良カマ（明治二四年一〇月五日生）登川

『カマンタ（大なべの蓋）を地面に置いて、その下でアカマター（蛇の一種）が七回孵化すると人をだますので、カマンタは地面に置かないで、木にさげなさいね』と言われていた。

ところが、ある女がアカマターにだまされてしまった。アカマターが人に化けて、赤いティーサージ（手拭）をかぶり女のもとへ来るのを隣の人が見て、

「ねえ、あなたたちに来る人を、あなたは男と思っているのですか」

と聞くと、

「はいそうです。私の恋人だもの、男ですよ」

というので、

「あれは人間ではないよ」

と教えてあげた。すると、

「どうして、そういうことを言うのですか」

「あなたはたくさんのウー（芭蕉）を紡いであるので、男が来たら針にウーを通して頭に刺し、あとでそのウーをたどってみなさい。そうすると行き先がわかるはずだから」

と言われた。

その通りにすると、ウーバーラ（芭蕉の糸を入れる竹のカゴ）の一杯紡いであったウーは、アカマターのガマに全部引っぱられていたんだって。

ガマの中では人間に化けたアカマターが、

「わたしは人間の女を妊娠させたよ、妊娠させたよ」
と自慢していると、別のアカマターが、
「なあ、人間というものは物知りだからダメになるよ」
というので、
「それなら、どうしておろすことができるのか」
と聞くと、
「③三月三日に海の砂を踏むと、サラサラとおりてしまうよ」
と話していた。
それを聞いた女は、三月三日になると海へ行き砂を踏むと、たくさんのアカマタの子がおりてきていたんだって。そんな話を聞いたよ。

注　①カマンタ・・・・藁と竹で組んだ大鍋の蓋（主にシンメーナービの蓋として使用）。
②アカマター・・・沖縄本島諸島に分布する固有種で大型の蛇。毒性はなく背面に赤褐色の黒斑がある。
③三月三日・・・・旧暦の三月三日は女の節句で、浜に降り潮で手足を清める行事。

昭和五五年五月一八日　富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子聴取　T2A11

【美里郵便局】

35 「ジュリ墓」での肝試し（ジュリ墓幽霊の肝試し）

嘉陽宗利（大正一一年二月一〇日生）美里

美里から仲原へ向かう途中の小高い山に、ジュリ墓と呼ばれている墓があったそうだ。

いつの頃からか知らないが、そのあたりに幽霊が立つというウワサが広がりました。

そのウワサを耳にした仲原に住む一人の男が、〈ウワサは本当だろうか〉と思い、確かめに行くことにしました。

ある日の晩のこと、男は酒を一杯ひっかけると〈さあ、肝試しに行ってみるか〉と、夕闇迫る頃、山へ向かいました。ジュリ墓あたりに近づくと、ウワサ通り暗闇に青白い顔の女の幽霊が立っていました。ウワサを信じなかった男も幽霊が現れたことに腰を抜かすほど驚きました。それでも男は、「フンドシでマジムンを避けることができる」という言い伝えを思い出し、自分のフンドシをはずし、棒に結び、めくらめっぽうに振り回しました。すると、なにものかにフンドシがつかまれてしまいました。怖くなった男は無我夢中で逃げ帰り、家族の者に、

「マジムンと戦い負けてしまった」

と話しました。

翌日、その場所に行ってみると、幽霊に捕まえられたと思っていたフンドシは、なんと、松の枝に引っ掛かっているのだった。[6]マブヤー　マブヤー。

注　①ジュリ墓・・・・ジュリとは遊女のこと。その遊女が葬られている墓のことをいう。
②美　里・・・・・・沖縄市美里。沖縄市の中央にある字。
③仲　原・・・・・・沖縄市美里にある俗称ナカバルのことで屋取。行政区では美里五班。宮里中学校北から東側一帯で、具志川市字江洲との境界に位置する。
④マブヤー　マブヤー・・マブイとは魂、人体に宿る霊魂のこと。ここでは、魂を落とすほどびっくりしたが、魂を落とさずにすんだことへの安堵感「ああ、よかった」という気持ちが込められている。

平成二年三月一四日　平識美恵子聴取　T74A12

36　お盆の始まり（エイサー由来）

仲宗根トミ（大正二年五月五日生）　登川

昔、たいそう金持ちの人がいました。『金は宝』といって貧乏者がお金を借りにきても絶対に貸そうとはしませんでした。

いつの日か、そのお金持ちの人は病気で死んでしまいましたが、後世（あの世）にお金を持って行くことはできず、『アイエー　ワージノー　ウッサキーヌジン（ああ、どうしよう。私のあんなに沢山のお金は・・・・）』と、貯め込んだお金のことばかり心配していました。子供たちは、

「お父さんはお金のことばかり心配している。どうしたらいいでしょうか」

と、有名なお坊さんのところに教えを乞いに行きました。

坊さんは、

「あなたのお父さんは生きているとき、お金が沢山あってもケチンボーになって、貧乏者にお金をあげたり、貸すこともなかった。お金は自分だけのものだといって貯えていたが、死んでしまうとそのお金が心配になっているのです。七月の一三日・一四日・一五日の三日間のあいだ御馳走を作り、お酒を準備して村中の青年を集めてもてなしなさい。そして青年たちに太鼓をポンポン叩いて、あなたのお父さんのとがをはらし、心を慰めなさい」

と教えられました。

そして、坊さんも、

「あなたの儲けたお金でこのように御馳走を作り、②アシビもさせているので、あなたはお金の心配をしないで下さい」と、三日間お祈りしました。

最後の日は、お金の形の③打ち紙を作り、

「④イチミのお金から出してお供えしてあります。打ち紙一枚は⑤イチマングヮンとしてお使いになれますから」

といって、七月一五日に打ち紙を火にあぶりました。

今でも⑥スーコーに打ち紙を燃やすのは、そういう理由からで、エイサーもその時から始まったということです。

注　①エイサー……旧暦のお盆に青年達が太鼓を叩きながら踊り、家々を回る芸能。
②アシビ……村芝居のこと。豊作を祈願して歌・三線・踊りなどをして楽しむこと。ここでは「エイサー」のことをさしていると思われる。
③打ち紙……銭型を打った紙。後生の銭と言われ、神仏に供えて燃やし、あの世に送る習俗がある。
④イチミ……現世に生きていること。
⑤イチマングヮン……貫（グヮン）はお金の単位。銭の一万貫。二百円にあたる。
⑥スーコー……法事。

昭和五五年五月一八日　大本敬子・西江美智・上江洲リカ（美里中二）聴取　T1B5

37　主人の命をねらう犬（化け犬）

島袋義堅（大正三年一二月一日生）古謝

昔、あるところに犬をたいそう可愛がっている侍がいました。

ある日のことです。犬は侍が寝ている傍を歩きまわり、なにやら身の丈をはかっているような仕草をしたり、裏庭に穴を掘ったりと奇妙な行動をしていました。また、弓の練習を見たり、矢を作っていると、矢の数を数えたり・・・と妙なことが数日続いていました。

侍は、〈どうしたことだろうか。この犬は穴を掘ったり、何か変なんだが・・・〉と不思議に思い、坊さんに教えを乞いました。

「実は、私の飼っている犬が私の体のサイズを測ったり、庭に穴を掘ったりしているのですが、それはどういうことでしょうか」

と、侍が尋ねると、坊さんは、

「犬はあなたの命をねらっているので、今度矢を作るときには一本よけいに作り、練習をするように」

とさとしました。

そうして、侍はいつものように弓矢を放つ練習をしていました。一本、二本、三本、・・・と矢を放ち、十本目の矢を放った時です。犬はひそかに侍の矢を数えていたらしく、これが最後だと思っていた矢を放つと同時に、侍めがけて飛びかかってきました。

侍はたいそうビックリしましたが、とっさに坊さんに言われて用意してあったもう一本の矢を放ち、向かってきた犬を射止め、危うく命拾いをしました。

その後、犬が化けて出ないように坊さんにお経を唱えてもらい、その犬を大事に葬ったということです。

平成二年三月二二日　宜保勝聴取　T63A7

38　カマド[1]の屁（おならの歌）

仲程セツ（明治三七年一二月一五日生）知花

昔のカマドは人が隠れることのできるくらい大きいものでした。

ある日、一人の泥棒が人の家に忍びこみ、カマドの中に隠れて夜になるのを待っていました。

家の主人が台所に入ったとたん、隠れていた泥棒が一発「プー」と屁をこいてしまいました。

どこにも人の姿は見えない。あたりをキョロキョロ見回した主人は首をかしげて、〈珍しいことだ。誰もいないのにオナラの音がしたんだがなあ〉とひとりごとを言い、

村ヌタンメーターガー　屁ヨーヒッチャル屁
ウヌ屁ヤ誰がヒッチャガヤー　ウカマガヒッチャサ　ワガヒッチャサ

と歌いだしたそうです。

なに、なに、泥棒はどうなったかって・・・

主人の歌に思わず笑ってしまい、御用になったかもしれませんね。

注　①カマド・・・・かまど。昔は石三つで作ったのでウミチムン（かまどの神）という名がある。のち、土をこねて作るようになった。（沖縄語辞典）

平成元年三月一一日　恩河尚・宮城昭美聴取　T90A3

39　蛸に骨のないわけ（猿の生肝）

松岡俊吉（大正三年一一月二〇日生）美里

龍宮の王様の娘が病気になったので、王様は、
「病気を治すことができた者に娘を嫁がせたい」
というおふれを出しました。
みんなが〈どうしたらいいものか〉と心配していると、賢い人が、
「この病には猿の生き肝をとってきて、それを干してあげれば治るよ」
というので、タコが連れてくることになったんだって。
サルのいる島に着くと、サルはちょうど大きな木に座っていた。タコは龍宮のおいしい御馳走を食べさせてやると、猿をだましてね、せなかにのせて連れてきたのさ。
そうして、やがて龍宮に着くという時に、タコが、
「実はサルさん、王様の娘が病気でね、その病気を治すにはあなたの生き肝が一番だということで、あなたの肝を取るために連れてきたんですよ」
と打ち明けました。すると、サルは、
「ああ、そうですか。タコさん、生き肝が欲しいのなら、そう言ってくれたらいいのに。かんじんな生き肝を忘れてきてしまったではありませんか」
タコはそれを聞くとね、あわててサルをまた島まで連れて戻ったそうだよ。
うまく逃げることの出来たサルは、たいそう怒って、

「このやろう、おまえは私の肝を取ろうとしたな。今度はお前の肝を取ってやる」と怒り狂って、タコをつかまえてグシャグシャになるまでさんざん叩いたそうだよ。

タコはこの時から骨がなくなり、たくさんの手が出て、フニャフニャになったということです。

平成二年三月一三日　平良真也聴取　T71B5

40　扇の寿命（センスの寿命）

桑江朝盛（明治四五年五月一七日生）上地

世の中にある、すべての物には寿命があるというお話をお届けします。

昔、扇子をもっている男が易者に、

「あなたの持っている扇子は、いついつまでの寿命ですよ」

と告げられました。その男は、

「そんな扇子の寿命まで占うことができるとは信じられない。これはウソだ」

と易者の言うことを納得しません。

ところが、その扇子の寿命を告げられたその日、男は信じてないまでも、言われたことが気になって仕方ありませんでした。男は早めに仕事から帰ってきて、他の人の手に触れないように扇子を天井から吊りさげ、寝そべって、寿命の尽きるその時をジーッと待ちました。

そこへ妻がやってきて、

「今日はどうしたの。仕事もせずにその扇子ばかり眺めて。私たちにひもじい思いをさせるつもりですか」

と怒って、すぐさまその扇子を取り、破り捨ててしまいました。まさに、その瞬間が易者が告げた時であったわけです。

平成二年八月二三日　平識美恵子・新城真恵聴取　T161A22

41　鬼餅由来①

栄野比トヨ（大正三年一〇月一〇日生）知花

あのね、首里の金城というところにあった話ですがね。

お父さんとお母さんを早く失った、イキー（兄）とウナイ（妹）の二人の兄弟がいました。

年頃になると、妹ウターの方は久高島に嫁ぎましたが、一人残されたお兄さんの方は、投げやりの気持ちからか、鬼になってよその家の山羊や豚を盗んできては、食べていました。食べる物がなくなると、人間の子供をさらってきて食べているというウワサが広がり、ウターの住んでいる久高島まで伝わってきました。

ウターは、〈自分のお兄さんがそんなことをしているとは・・・。家畜なら買うこともできるが、人間の子供はそういうわけにもいかない。なんとかしなければ〉と、お兄さんの様子を見にいきました。

すると、お兄さんは、

「いいところに来たぞ、ウター。今、薬を煎じているからおまえも食べていきなさい」

と言うので、

「ああそうですか、お兄さん。どんな御馳走かみてみよう」

と鍋を開けて見ると、ウワサ通りに、鍋には人間の子供が入っていました。

ウターは自分も子供を連れてきていたのでビックリして、〈アヒー（兄さん）は私の子供も殺しかねない〉と思い、子供を負ぶって、

「ねえ、アヒー、ちょっと便所まで行ってこようね」

と言うと、アヒーはウターが逃げたらいけないと思い、ウターの手に縄をかけました。

ウターは賢かったので、手にかけられた縄をはずし[1]フールヤー（豚小屋）の石につないで逃げたが、アヒーは縄を引っ張りながら、

「ナーマヤミ、ウター。ナーマヤミ（まだか、ウター、まだなのか）」

と言っていました。

ウターが船に乗って行こうとする時、アヒーに追いつかれてしまったので、ウターは急いでサバニ[2]をひっくり返し、その下に隠れていました。するとアヒーはそのサバニの上に立ち、

「アイヤー、そこまでウターの姿は見えていたのに残念。せっかくの御馳走を逃がしてしまったなあ」

と悔しそうに、足をバンバン踏みならしていました。

ウターは、〈ああ、やっぱり、私たちを食べようとしていたんだなあ〉とアヒーがいなくなるのを見計らってから、船に乗り島に帰りました。

何日か経ったある日の事、ウターはお兄さんの大好きな餅をつくり、出掛けました。アヒーのものにはカワラを入れた餅を作り、自分のものは、本物の餅を作って。そうして、

「アヒー、今日はアヒーの好きな餅を沢山作ってきたから、さあ、金城[3]バンタで景色でも眺めながら食べよう」

とおだてて、連れていきました。

アヒーは瓦の入っている餅でもパクパク食べるのでウターは、〈本当の鬼になってしまったんだねえ、アヒーは〉と悲しくなりました。そして、アヒーが餅を一生懸命に食べているすきに、ウターは下着を取り、前をはだけていました。ちょうどその時、ウターは月のものが出ていたらしく、真っ赤になっていたので、アヒーが、

「ヌーヤガウマー（そこはなんだ）」

と聞いたので、

「ここはねアヒー、鬼を食べるところだよ」
と答えると同時に、金城バンタから突き落として殺してしまいました。

ウニムーチーは、この話に由来するもので、ウターは村の人々から、
「村人全員でかかっても鬼を退治することが出来ないのに、あなたはすごい」
と喜ばれ、鬼を退治した餅のことを『チカラムーチー・ホーハイムーチー・カリームーチー』と呼ぶようになり、今でもムーチーを炊いた煮汁は、『ウネーフカ　フコーウチ（鬼は外、福は内）』といって屋敷の回りにまき、ムーチーを包んだカーサ（サンニンの葉）は十字に結んで、人の出入りする入口や軒先に吊るし、鬼が家の中に入ってくるのを防ぐようになったんだってさ。

注　①鬼餅・・・・・・・旧暦の一二月八日、ところによっては一二月七日に月桃の葉で包んだ餅を作って子供の健康を祈願する「ムーチー」と称する行事があり、現在でも行われている。餅粉に水を加えよくこねて、巾約五センチ、長さ一二センチぐらいの大きさにして、サンニン（月桃）の葉に包み蒸して作る。かつては、餅を蒸した煮汁は魔よけとして庭にまき、餅を食べたあとのサンニンの葉は十字型にして、玄関先や家の四隅、豚小屋等に魔よけとして吊していたが、現在ではその光景はあまり見受けられない。また、子供のいる家庭では子供の年の数の餅をヒモで吊す光景もみられた。

②首里の金城・・・「首里」は現在の那覇市首里をいう。「金城」は首里城址の南側にある現在の金城町。

③久高島・・・・・・沖縄南東部知念半島の東方約五キロメートルに位置する。沖縄創世神アマミキヨが最初に降りた地として知られ、イザイホーに代表される古い祭祀行事が残されている。

④フールヤー・・・養豚場をかねた便所。サンゴ石灰岩で囲いそこに豚を入れて飼い、人糞は豚の飼料となった。

⑤サバニ・・・・・・サバニは松を使った刳舟であった。沖縄の沿岸漁業に用いられてきた船。

⑥バンタ・・・・・・端。はしっこ。崖っぷち。

⑦ホーハイムーチー・陰部をさらけ出したことから「名ホーハイムーチーと呼ばれたことがある。女性の陰部が邪悪なものを退ける力があるという信仰は「古事記」などにもみえる。

⑧カリームーチー・・カリーはめでたいことの意味で、ここでは縁起の良い餅のこと。

昭和六一年七月一〇日　宮城昭美・宮里信勇聴取　T27A1

42　猿長者（チブルの種）

島袋サダ（明治二六年九月五日生）高原

昔、大晦日に神様が金持ちの家にやってきて頼みました。

「一晩でも泊めて下さい」

「いや、だめだ。今日は年の晩でもあるし、泊めるわけにはいかない」

と断られました。

隣には、貧乏な年寄りの夫婦が住んでいて、その家では食べるものが何もないので、火をたいてあたたまるだけの火[1]正月をしていました。神様がその家に頼むと、

「ごらんのとおり、御馳走はありませんが・・・」

というと、

「それでもいいですから」

といって泊めてもらいました。すると、神様は、お礼に鍋に何かを入れて、御馳走をいっぱい出してやりました。

翌朝、神様は帰る時に、チブル（ひょうたん）の種を、金持ちの家と、貧乏者の家にあげました。種をまくと、金持ちの畑にも、貧乏者の畑にもいっぱいチブルが実りました。金持ちの家のチブルを切るとチブルの中からハチがたくさん出てきて、主人はさされてカラスになり、女主人は猿にされてしまいました。

金持ちの家には住む人がいなくなったので、その家に貧乏者の夫婦が住むようになりました。ある日のこと、神様が、

「どうですか」
と尋ねると、
「毎日、猿になった主人がやってきて、庭にある黒石にすわり困っています」
と言うと、
「猿がいつも座る黒石を焼いておきなさい」
と教えて下さいました。言われたように、石を焼いておくと、いつものように猿が来て座り、とたんに、お尻を火傷してしまいました。
その時から、猿のお尻は赤くなったということです。

注　①火正月・・・・貧乏で正月の御馳走の準備を出来ない者がジール（地炉）の火にあたり、正月を迎える。

平成二年七月六日　与那嶺昭郎・豊岡早苗・富平恵智子・平良真也・大川清子聴取　T84A2

43　サギビサーをしてはいけない（サギビサーはいけない訳）

上根ウサ（明治三一年一二月五日生）宮里

昔、あるところに大変仲のよい夫婦がいました。二人は、

「もし、お前が先に死んでも後妻をもらうことはしないから、私が先に死んでも再婚はするなよ」

と約束をしました。

何年かが経ち、妻が先に亡くなると、夫は約束を破り、再婚をしてしまいました。死んだ妻は後世で心を傷めていました。

ある日のこと、坊さんが尋ねて行った家でのことです。坊さんは家に上がることはせずに、縁側に腰をかけて話をしていると、いきなり床下からはい出てきたハブに足を噛まれてしまいました。びっくりした坊さんは、

「足をハブに噛まれている。誰か助けてくれー」

と救いを求めるが、みんな怖がって逃げていってしまいました。坊さんは少し気をおちつかせてから見てみると、ハブと思っていたのは女であった。坊さんが訳を聞くと、

「実は、私が生きていた時に、夫と、互いにどちらが先に死んでも再婚せずにいようねえと約束をしたのに、私が先に死ぬと夫は約束を破り再婚をして、私を苦しめています。どうか、私の家に行ってフーフダをはずしてもらえませんか」

と頼みました。坊さんは、

「ああ、そうですか。でも、私はあなたの家を知りません」

「私が案内いたします」

と、魂が家まで案内した。

その家では、夫が友達と酒を飲んで賑わっていた。坊主は中に入りフーフダをはずすと、それと同時に男の命は妻に奪われてしまったということです。

そんな言い伝えから、よその家を訪ねた時は、『サギビサーはしないで、ちゃんと部屋に上がるように』と言われるようになったんだとさ。

注　①フーフダ・・・符札。魔除けの守り札。
②サギビサー・・・部屋に上がらずに縁側に腰かけること。

平成二年七月六日　宮城昭美・宮里信勇・上門博之・武嶋昭子聴取　T79B1

機関誌別民話一覧

【農協だよりみさと】

	No	タイトル	話者名	生年月日	出身地	調査月日
1	48	三人の力持ち	盛島　五郎	M39・12・10	池原	S60・7・1
2	49	犬と猫と猿の三枚銭	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S60・9・9
3	50	カニの背中がくぼんでいるわけ	島袋　盛保	M37・11・26	知花	S60・10・13
4	51	クシャミをしたらなぜ「クスケー」というのか	松下　盛一	M45・5・10	池原	S60・7・8
5	52	塩吹き臼	仲宗根盛雄	M43・9・15	登川	S60・8・12
6	53	登川部落の始まり	平田　嗣光	T6・5・5	登川	S60・9・30
7	54	カフンジャー由来①	松下　盛一	M45・5・10	池原	S60・7・1
8		カフンジャー由来②	島袋　タケ	T7・9・1	知花	S61・7・9
9	55	シーグダキクミ	島袋　盛保	M37・11・26	知花	S60・10・13
10	56	ヤパチャミーと行商人の勝負	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S60・10・13
11	57	アフグン親方	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S61・8・7
12	58	ヤパチャミーとスムカタランポー	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S60・10・13
13	59	米寿由来	喜納　兼増	T2・2・10	登川	S60・10・1
14	60	エイサーの始まり『悪払いから』	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S60・9・9
15		エイサーの始まり	仲宗根トミ	T2・5・5	登川	S55・5・18
16	61	察度王	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S61・8・6
17	62	知花当石川	川上　亀	M29・3・18	美里	S62・6・22
18		メーヌシジヌスティーグゥーウスメー	川上　雄善	T10・12・17	美里	S62・6・22
19	63	猿になった金持ち	栄野比トヨ	T6・10・10	知花	S61・7・10
20	64	カフンジャー由来	島袋　盛保	M37・11・26	知花	S62・10・26
21	65	棒節の始まり	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S62・9・10
22	66	歌う骸骨	島袋　盛保	M37・11・26	知花	S60・9・9

【広報おきなわ】

23	154	イシザルとジジョー	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S61・8・6
24	155	阿麻和利と鬼大城	島袋　盛保	M37・11・26	知花	S60・10・13
25	156	侍の牛	久場　政三	M43・7・25	園田	S60・11・27
26	157	子育て幽霊	辺土名ナベ	M37・5・10	池原	S60・7・29
27	158	アジャナの兄弟	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S61・8・6
28	159	カシチー由来	新里八十孫	T元・8・10	知花	S60・10・13
29	160	名護親方	喜納　兼正	M42・9・26	登川	S60・10・1
30	161	歌・三線の始まり	島袋　次郎	M34・4・7	知花	S61・8・7
31	162	鬼餅由来	東　シズエ	M40・6・25	池原	S55・5・18
32	163	大蔵の客	幸島　マツ	M42・1・25	池原	S55・5・18
33	164	十二支由来	仲宗根盛雄	M43・9・15	登川	S60・8・12
34	165	蛇婿入	高良　カマ	M24・10・5	登川	S55・5・18

【美里郵便局】

35	6	「ジュリ墓」での肝試し	嘉陽　宗利	T11・2・10	美里	H2・3・14
36	7	お盆の始まり	仲宗根トミ	T2・5・5	登川	S55・5・18
37	8	主人の命をねらう犬	島袋　義堅	T3・12・1	古謝	H2・3・12
38	9	カマドの屁	仲程　セツ	M37・12・15	知花	H元・3・11
39	10	蛸に骨のないわけ	松岡　俊吉	T3・11・20	美里	H2・3・13
40	11	扇の寿命	桑江　朝盛	M45・5・17	上地	H2・8・23
41	12	鬼餅由来	栄野比トヨ	T3・10・10	知花	S61・7・10
42	13	猿長者	島袋　サダ	M36・9・5	高原	H2・7・6
43	14	サキビサーをしてはいけない	上根　ウサ	M31・12・5	宮里	H2・7・6

参考文献

『沖縄語辞典』国立国語研究所編集　大蔵省印刷局発行　昭和五八年四月三〇日

『角川日本地名大辞典47　沖縄県』竹内理三編　角川書店発行　昭和六一年七月八日

『原色沖縄海中動物生態図鑑（五版）』臼井祥平著　沖縄教育出版発行所　一九九〇年八月一日

『沖縄いろいろ事典』ナイチャーズ　垂見健吾他　株式会社新潮社発行　一九九二年四月二〇日

『私たちの沖縄市　―みに事典―』崎原恒新著　一九九一年八月一日発刊

『沖縄おもしろ方言事典』沖縄雑学倶楽部編者　金城正雄発行　一九九八年五月一〇日第九刷

『北中城の民話』北中城村教育委員会発行　平成五年三月二〇日

『いしかわの民話　下巻・伝説編』石川市教育委員会発行　昭和六〇年三月三一日発行

『具志川市史　第三巻　民話編　下　昔話』具志川市史編さん委員会編集　具志川市教育委員会発行　平成十二年三月三十日

『沖縄大百科事典　上・中・下』沖縄タイムス社発行　一九八三年五月三〇日

年令早見表／2002（平成14）年

西暦	年号	年令
1891	明治24	111歳
1892	25	110
1893	26	109
1894	27	108
1895	28	107
1896	29	106
1897	30	105
1898	31	104
1899	32	103
1900	33	102
1901	34	101
1902	35	100
1903	36	99
1904	37	98
1905	38	97
1906	39	96
0907	40	95
1908	41	94
1909	42	93
1910	43	92
1911	44	91
1912	大正元	90
1913	2	89
1914	3	88
1915	4	87
1916	5	86
1917	6	85
1918	7	84
1919	8	83
1920	9	82
1921	10	81
1922	11	80
1923	12	79
1924	13	78
1925	14	77
1926	昭和元	76
1927	2	75
1928	3	74
1929	4	73
1930	5	72
1931	6	71歳
1932	7	70
1933	8	69
1934	9	68
1935	10	67
1936	11	66
1937	12	65
1938	13	64
1939	14	63
1940	15	62
1941	16	61
1942	17	60
1943	18	59
1944	19	58
1945	20	57
1946	21	56
1947	22	55
1948	23	54
1949	24	53
1950	25	52
1951	26	51
1952	27	50
1953	28	49
1954	29	48
1955	30	47
1956	31	46
1957	32	45
1958	33	44
1959	34	43
1960	35	42
1961	36	41
1962	37	40
1963	38	39
1964	39	38
1965	40	37
1966	41	36
1967	42	35
1968	43	34
1969	44	33
1970	45	32
1971	46	31歳
1972	47	30
1973	48	29
1974	49	28
1975	50	27
1976	51	26
1977	52	25
1978	53	24
1979	54	23
1980	55	22
1981	56	21
1982	57	20
1983	58	19
1984	59	18
1985	60	17
1986	61	16
1987	62	15
1988	63	14
1989	平成元	13
1990	2	12
1991	3	11
1992	4	10
1993	5	9
1994	6	8
1995	7	7
1996	8	6
1997	9	5
1998	10	4
1999	11	3
2000	12	2
2001	13	1
2002	14	0

おわりに

「昔話をお聞かせ願えませんか」と市内の古老に呼びかけて、方言による語りの記録作業に着手してから二十年の歳月が経ちました。その間、昔話を聞かせてくれる古老がめっきり少なくなり、聞き取り調査も困難をきわめております。かつては、どこでも聞くことのできた「雀孝行」の話できえ、今では、とんと耳にすることがありません。

沖縄市教育委員会ではこのような含蓄のある古老の語り口を後世に残すため、音声による記録はもちろん、これを文字化して広く市民のみなさまに読み継がれる本として発刊することになりました。

本書に収録された昔話の語り手には、すでに物故された方もおりますが、テープに遺録された在りし日の声調は、時間を超越して聞くものを魅了してやまないものがあります。

このように、音声でなければ伝えることが難しい昔話の領分をあえて文字化し、本にすることは、多くの市民にそのおもしろさの一端でも読みとっていただけたらと考えたからです。本書が昔の先祖たちをしのぶよすがとなり、沖縄市の未来を創造するこころの架け橋になってくれることを祈念するものであります。

最後に、編集に際し貴重なご意見と援助を下さいました皆様に、厚くお礼を申し上げます。

むかしばなしⅠ

沖縄市文化財調査報告書第26集

平成14年3月20日　発行

発　行　沖縄市教育委員会
編　集　沖縄市立郷土博物館
〒904-0031　沖縄県沖縄市字上地235-3
☎（098）932-6882
印　刷　株式会社 沖匠堂
沖縄市中央3丁目5番46号
☎（098）934-0987